

紹介 「社会学における理論と実践の危機」

ラース・ウデー

櫻 井 義 秀

Lars Udehn, 'Sociological theory and practice in crisis', pp. 6-42 edited by Ulf Himmelstrand, *The Sociology of Structure and Action*, SAGE Publications, 1986

YOSHIDE SAKURAI

Summary

This article is the introductory part of the book, which provides chronological illustration, how the crisis of sociological theory and practice has been much discussed since 1960s; and why the idea of scientism, applying a natural science approach to social science, and the idea of social engineering, aiming at rational control and reconstruction of social phenomena, has been criticized by humanistic and interpretive sociology. The author explains the limits to scientism and the consequent obstacles to social engineering, and refers to the problem of human freedom, politics, because this contradicts both determinism and control presupposed by social engineering.

訳者前書

ラース・ウデーの論文「社会学における理論と実践の危機」は、ウルフ・ヒンメルストランドが編集した『社会学：危機から科学へ？』、巻1、構造と行為の社会学』の巻頭論文である。ウデーは、スウェーデンのウプサラ大学社会学部の特別研究員で、社会科学方法論に多数論文がある。編者のヒンメルストランドもウプサラ大学で社会学の教授を勤めており、さらにパリの国際社会科学協会 (International Social

Science Council) の副会長もかね、社会学と政治経済学に業績を持っている。

本書の題名にもなっている「社会学の危機」は、1960年代以来叫ばれて久しい。パリの五月革命やベトナム反戦運動に見られた学生の異議申したて運動が歴史として語られ、当時のラディカル社会科学の言説が学説史に素材を提供している現在、「危機」を正面から取り上げるのは、いささか時代遅れの感が否めない。それについてヒンメルストランドは、確かに「危機」は1960年代に始まったが、終わったわけではなく、

エスノメソドロジーや象徴的相互作用論をはじめ、多数の競合する理論が存在していること自体、危機の継続を示しているのだという現状認識を持っている。しかも、危機の二側面として、社会をどう把握するかという理論の次元での学派の分裂、ひいては学者集団の党派性の問題と、自然科学を範とする社会科学における実証主義のゆらぎをあげている。前者に関して、日本の社会学では、アメリカから「危機」をそのまま輸入したため、パーソニアンのグランドセオリーが一時とりこわしを宣告され、その後勢力の優劣はあれ、多数の理論が住み分けている状態にある。しかしながら、後者の実証主義については、「危機」になったところか、大量調査・コンピュータによる分析を行なう科学的社会学が隆盛である。実証主義の危機は巧妙に素通りされたのである。ところが、ヒンメルストランドによれば、ヨーロッパにおいて「危機」は実証主義に起こったのである。西欧がアメリカから取り入れたものは、パーソンズのグランドセオリーやマートンの中範囲理論ではなく、調査方法と質問紙やインタビュー、態度測定のスケーリングや多変量解析を用いた意識調査の手法だった。西欧では、これらの科学的装いを施された「実証」に疑問が出されたのであり、複数の社会学理論が共存するのは日常態だったのである。つまり、社会を理解するための理論よりも、その理論と研究の対象となる社会とを繋ぐ方法論に、とりわけその自然科学的アプローチに疑問が提示されたのである。それは自然科学的アプローチの全面的否定ではなく、人間・社会を対象とする科学の場合、自然を対象にする自然科学の方法論は応用に限界があるというものである。

ヒンメルストランドによれば、社会科学における理解の対象の性質、及び研究主体と理解の対象との関係は、自然科学のそれとは全く性質を異にする。前者については、不変・定量化・予測など自然科学で前提されたことが常に蓋然的であり、しかも理論を実験によって確認するという操作が不可能である。さらに、操作という行為は、社会科学において政治的・倫理的問

題を喚起せずにはおかない。後者に関しては、操作や測定といった一方向的な理解だけでなく、研究対象と直接に言語やコミュニケーションによって理解することが可能であるということ、もっと言えば、社会自体社会構成員の知識から成り立っており、研究者はこのような知識の二次的理解に従事しているに過ぎないとも言える。

しかし、社会のなかにも自然と同じような扱いができるものもある。彼は、社会学者が研究する際踏み込む三つの領域を指摘する。第一に、どのような社会も自然空間の中に位置付けられ、人間が人工的に作り上げた都市の発生・成長なども自然環境との関係抜きには考えられない。次に、政治・経済体制、多様な組織などの領域があり、個人の意図とは別に、いったん成立すれば独自の運動形態を持つようになる。これらは自然環境との相互作用で存続している。この二つの領域は、自然科学の対象同様客観的に研究することが可能である。第三の領域は、「ある特定の状況に対する主観的定義」がなされる場である。個人的判断から共有された判断、特定集団内での公共的知識（言語・規範・イデオロギー）を理解の対象とする場合、これら構成された社会的リアリティは、そこに内在する論理構造を理解することなしにつかまえることができない。すなわち、野球は身体の生理的メカニズムやボールの運動法則が分かっただけでは理解されない。野球のルールをまず知らなければならぬのである。しかも、この領域では予言の自己成就・破壊が生じる可能性があるために、調査によって研究の対象が態度変容をなすことも十分考えられる。エスノメソドロジー・現象学的社会学は、主観的定義により構成された現実を重視するが、他の二領域をも視野に治める必要があると、ヒンメルストランドは考えている。そうすることで自然科学の方法論が生かせるし、自然科学と完全に切り離れた社会科学の独自性という議論に仕立てあげずにすむのである。

むしろ、それぞれの領域を包括する構造を前提しつつ、研究方法としては、領域ごとの原理・論理構造に則したやり方でいく、また、それら

を相補的に関係させる構造を探究していく、といった方式を勧めている。或る集団により共有された問題解決のルール・基準をパラダイムと社会的に捉えれば、一つの社会現象を解明するために複数のパラダイムを利用しようというものである。

「パラダイム」という言葉をより柔軟性を持たせて使うとすれば、社会学者の多くは、多元的パラダイムを持たなくては、社会科学を科学としてやれなくなっていると今や自覚している。社会生活と人間の存在は、自然環境、身体組織、機械や建築物のハードウェア、人間が作り上げた概念のソフトウェア、規則やプログラム、地域の集団的行為 (the collective actors of local)、階級、年齢、ジェンダー—或いはイデオロギー的利害関心、相互作用を成立させる外的条件などから成り立っている。これらの領域はそれぞれにおいて独自の原理にしたがって動き、これらの原理を通して理解されねばならない。また、これら異なった領域の連結部分を的確に表す構造を発見することも同時に求められる。自然科学を模倣した一元的な概念といったしろものでは、社会的構成物を把握することも分析することも不可能であり、仮にそういうやり方をとったとしたら、それは単なる形而上学に終るだろう。(Himmelstrand, p.4)

しかしながら、多元的パラダイムという手法には次の疑問が提示される。先にも述べたように、パラダイムは、「1) 或る集団の成員によって共通して持たれる信念、価値、テクニックなどの全体的構成、2) その構成中の一つの要素、つまりモデルや例題として使われる具体的なパズル解きを示すものであって、それは通常科学の未解決のパズルを解く基礎として、自明なルールに代わりうるもの (クーン, 1971, p. 198)」である。後半部分の具体的なパズル解きは、前半部分に述べられた共通の言語 (専門用語) によって構成されたルールでなされなければならないし、その場合にのみ論理的な一貫性を持つ

である。そうであれば、複数のパラダイムを相補的に関連させるには、共通の言語体系、もしくはあるパラダイムの言語を別のパラダイムの言語に翻訳するルールが確立されねばならない。仮に、このようなルールが確立された場合、それは全ての現象を説明できるパラダイムを構成することになるのだから、もはや複数のパラダイムを認める必要はなくなる。後に作られたパラダイムが、先の時代のパラダイムをも説明できるのであれば、後者を用いればよい。また、パラダイムが複数存在しているということ自体、パラダイム間の相互伝達が困難、或いは妥当でないことが前提にされているのではないか。そうであれば、ヒンメルストランドの目論見は、自家撞着に陥るのではないか。少なくともこれまで試みられた総合化は、彼が危惧する一元的概念によってしかなされていないのである。

さて、社会学の危機は、自然科学的アプローチ (実証主義) の危機であるだけでなく、社会的実践の危機でもあった。但し、ここでいう実践とはマルクス主義のそれではなく、社会計画・社会改良主義の実践を指す。これに関して、ウデーは、草創期のアメリカ社会学が持っていた改良主義の情熱に触れている。この情熱にプラグマティズム・行動主義・操作主義が順次加わって、社会工学の試みに至る。しかしながら、ここでも三つの問題が生ずる。社会工学が、現時点での社会システムを無条件に肯定し、その維持を図る体制側の理論に陥る可能性、ないしは既に御用学問に過ぎないと判断するラディカル社会学の問題が一つ。社会工学を可能にするためには未来の予測を前提にしなければならないが、一見その役目を果たしているとみなされている科学主義の限界が二つ目。さらに、社会的統御と個人的自由のパラドックスが問題となる。この議論はウデーの論文にスケッチされているので再言しないが、ウデーが社会工学の問題に関心を寄せる背景には、ウデー、ヒンメルストランドともにスウェーデンの社会学者であり、社会福祉を高度に発達させた政治体制に影響を受けたという事情がある。

以上のような社会学の危機が、どのようにし

て現われてきたかを社会学史の上で跡付け、また、その現状と対処のための試論を概説しているのが本論文である。

文 献

Himmelstrand Ulf, 'Introduction', *The Sociology of Structure and Action*

トーマス・クーン 中山茂訳、『科学革命の構造』みすず書房 1971年

はじめに

1960年代及び70年代にかけて西欧社会学の危機、ないしは「迫りくる危機」について多くのことが語られた。この議論の背景となったのは、西欧社会学の支配的なパラダイム（或いは複数のパラダイム）が、社会学と社会的現実についての競合するアプローチから攻撃にさらされたという事実であった。この攻撃は、理解社会学の諸学派、解釈学、象徴的相互作用学派、日常言語哲学、それにフランクフルト学派の「批判理論」、及び人間主義的マルクス主義の立場からもなされた。

この章では、社会学における理論と実践、及び両者の関係についての我々の見解に対するパラダイムの危機の衝撃について議論されることになる。しかしながら、これは人間学の論文ではないので、実践（praxis）の概念そのものには言及しない。「社会学的実践」によって、社会学を行うという意味での実践よりも、社会学者と社会学に通じている人々の社会的実践一般が理解されるだろう。この章の目的として、社会学的実践のもっとも重要な形態に、社会学理論を人間の営みに適用する方式をあげる。ここでは、パラダイム危機とその後の影響が強調されるが、始めに、危機以前の社会学における支配的パラダイムによって考えられた理論と実践の関係を論評する。

社会学，科学主義，社会工学

社会学という学問領域は生まれていないにし

る、社会学という言葉が生まれて以来、社会学における支配的なパラダイムは、自然科学をモデルにしたものであった。社会科学は、自然科学と同じタイプの知識を生みだすことを目指すという考え方を科学主義と名付ける。この種の知識に顕著な特徴は、量化された変数間の関連として述べられる法則の形態をとり、予測を可能にするところにある。さらに、その特徴をあげれば、自然現象の合理的な制御を可能にすることである。このように予め考えられたプランや青写真に従って、社会現象の合理的な制御や再構築を目指す活動を社会工学と名付ける。本節では、科学主義と社会工学が、社会学史上にその影を大きく落とし初めてきたことを描こうと思う。

このことは、既にユーラン・テルボーンによって『科学，階級，社会』の中で、学問としての社会学は、ブルジョアジーによる革命以降明らかに保守的な偏りを伴って登場してきたことが論じられた（1980:115ff.）。テルボーンによれば、「社会学の時代」はブルジョアジーの革命とプロレタリアートの革命との間の時代である。社会学は、「社会問題」、特に労働者階級の貧しい者と悲惨な生活を送っている人々を扱う試みとして登場したのである。また、社会の分裂状態と折り合いをつけ、過激な社会変動を避ける企てでもあった。「社会学」は、社会問題に当初から関心を持っていたために、「社会主義」としばしば混同されたが、これは殆ど外的である。社会学者の多くは保守的であり、実際には全員革命に反対した。社会学者は総じて革命の前に改革を勧め、明らかに革命を避けることを意図していた。そして、大衆を制御するために提案された基準は、道徳教育であった。

このように社会学は、最初から強い改革の情熱に溢れており、政治の場で応用することに着目していた。しかし、19世紀の大社会学者の中には、明らかにこのやりかたをとらない一人の人物がいた。ハーバート・スペンサーである。徹底的に個人主義の主張者であるスペンサーは、国家の政治の一般的な役割を最小限にし、その代わりに諸個人の自発的な協働に基づく社会組

織を好んだ。(Spencer, 1966:57ff.)

マックス・ウェーバーは、社会学者は社会改革者でもあるという通例に反するもう一人の例外である。価値の問題から事実の問題を分離すること、科学者は、講壇では価値問題と政治的な問題には禁欲することが要請される、という彼の主張は周知されている。彼によれば、科学者は倫理と政治の領域においてなんら特別な権威を持たず、そのため自らの職分を全うする時には、これらの問題に対して沈黙せねばならない。しかしながら、社会学者の間では、ウェーバーは理論と実践の関係についての基本的な見解を作ることに、最も貢献した一人である。彼によれば、科学は「外在的な活動の対象、及び人間の諸活動を計算することで、生活を制御する技術に貢献する。」そして、それはいったん目的が決定されれば、適切な手段についてアドバイスを与えることでなされる。「もし、あなたがこれこれの立場をとるなら、科学的な経験に従えば、あなたの信念を実行に移すために、これこれの手段を取らねばならない。(1970:1501)」

また、ウェーバーは、近代社会の発展に対する科学と技術の効果を最も明晰に見つめ、この発展を著作の主要なテーマとした社会学者の一人でもあった。「我々の時代の運命は合理化と理性化、そしてとりわけ『世界の脱魔術化』によって特徴づけられる。(1970:155; ウデー 1982を参照)」

「社会学」という言葉はオーギュスト・コントまで溯るが、「実証主義」という言葉も含めて、彼の主要なアイデアの多くは、彼の雇主であったアンリ・ド・サン・シモンの初期の著作に見出される。サン・シモンは、自然科学の大勝利と18世紀フランスの進化的な楽観主義に力づけられ、人間に関する事柄に科学的な方法を適用すること、実証科学を基礎にする社会秩序の再編を主張した。サン・シモンによれば、実証科学の特質は、特に実験形態の観察と予測にある。「我が友よ。科学者という者は、予測する者である。それは、科学が予測の手段を持ち、有効であり、また科学者をその他の人々に

対して優越させるからである(1964:6)。」彼はアンシャンレジーム古い封建社会が、その精神的な活動源であったカソリズムとともに、明らかに過去に属していると確信し、産業社会とその支配者である科学者と産業者、芸術家を歓迎した。新社会になると、産業関係が、必要とされる有機的社会結合を生み出すのである。人による人の支配であった政治は、産業生活の管理におきかえられるであろう。サン・シモンは生涯を通じてカソリズムに置き換わる精神的な統合力の必要を感じていた。従って、彼は晩年に「人は互いを兄弟のように遇するべきだ」という最高原理を核に新しいキリスト教を説教した。これは多くの貧者の生活を改善する義務への献身を含んでいたと解釈される(1964:83)。

コントは、青年時代サン・シモンの私設秘書として働き、彼に基本的な考え方の多くを負っている。しかしながら、二人が袂を分かつようになった後、コントは師匠からの借りを軽視しようとした。実証主義は、コント自身がつくりあげたものとして進められた。コントによれば「実証主義は本質的に哲学と政治から成立している(1975:317)。」従って、その主たる目的は二つある。「科学的な概念を一般化し、社会生活の技術を組織化すること(1975:318)。」そのモットーは「進歩させるために知ること」であった(1975:450)。しかし、実証主義の見込みを達成するために、諸科学の階梯の最高の段階にある社会学を実証主義の段階にまで高めることが残されていた。この段階において、科学は、神学的段階や形而上学的段階で基礎となった創造力よりも、観察に基盤をおくのである。

フランス革命の痕跡が生々しい時代に生きたコントは、ブルジョアジーという新しい階級の擡頭と、もう一つの階級、労働者階級が舞台上に登場してきたのを目の当たりにした。コントは、サン・シモンのようにこの展開を歓迎した。彼は、産業社会の乱暴な進め方を嘆くが、これを社会の進歩を促すものとみていた。コントにとって重要な問題は、いかにして秩序と進歩を組合せるかであった。これに対する解決が実証哲学である。結果的に、実証主義の第二のモットー

は「秩序と進歩」となる (Comte, 1975:341)。

コントが提示した解決の最初の部分は、実証科学としての社会学の発展と、それを応用して社会を再組織化することからなる。すなわち、人間社会の発達を支配する社会法則を発見すること、それによって何が起こるかを予測し、それによって行動することである。つまり、「人々が実生活においてひとつの現象を益になる方につくりかえることができるのは、諸現象の法則を知ること、それによって予測することが可能になっての話である。——科学から予測がもたらされ、予測から行動がもたらされる (Comte, 1975:88)。」しかし、社会法則の知識は充分ではない。社会をうまく再組織化するためのさらなる要請としてコントは、大衆をこの方向で採用された基準に従わせねばならないと付け加えた。道徳的革命が必要なのである。しかしながら、この内的な精神的再生をもたらす任務は、科学者に与えられた。この課題は、実証的人類教の祭司に任せられるのである。

それに対して、マルクス主義はコントの社会学とは実質において全く異なり、正反対の政治的意味合いすら持っている。ところが、科学に関する一般的な見解と、人間に関する事象に理論がうまく適用できるという展望において、二つの理論にはある種の共通点がある。周知のように、マルクス主義の内部には異なった流れがあるが、マルクス後期の著作及びエンゲルスの科学的社会主義を見れば、コントとの間に驚くべき共通点があることに気づく。例えば、『資本論』第一巻の序論に有名な一節がある。資本主義生産の法則は「完全な必然性によって不可避免的な結果へ向って作用する (Marx, 1954:19)。これとコントが述べた「文明の必然的進化を支配する根本法則」とか、「根本法則は、一般的に人類が進化する際、経過せねばならない連続する諸過程を厳密に決定する (Comte, 1975:42)。」を比較されたい。

別の共通点は、公共の計画に従って組織された未来社会という理念に見ることができる。しかし、コントが政治的アナキーと格闘することを望んだ同じ土俵で、マルクスとエンゲルス

は、資本主義生産の経済的アナキーにピリオドを打つことを願ったのである。マルクスとエンゲルス、コントとサン・シモンにもうひとつ共通点をあげれば、人が人を支配する統治が来るべき社会ではなく、単なる事物の管理にとって替えられることである (Udehn, 1981:53)。

実証主義者の社会学は19世紀に作られ、その頂点をきわめた。20世紀では、「論理実証主義」として知られるウィーン学団の哲学に実証主義の再興があった。ウィーン学団の指導的メンバーの一人にオットー・ノイラートがいる。彼の哲学と社会学は、コントの実証主義をマルクスの科学論と唯物論に総合し、これを認識論と論理学における時代の成果に合せようとする試みに他ならない。コントのようにノイラートは、どこにおいても形而上学を科学的世界観に置き換えることを望んだ。

結局のところ、生活全体を包含する近代科学の発展は、理論構築に従事する労働者と実践的な労働者との緊密な結合を強固にした。機械学を含むテクノロジーは技術者の科学である (機械の専門技術者)。生物学は、医者と品種改良家の科学である (身体の専門技術者)。そして、社会学は、政治家とオルガナイザーの科学である (社会の専門技術者) (Neurath, 1973:329)。

ノイラートによれば、科学を特徴づけるものは法則 (相関関係) である。「統合された科学は全ての科学的法則を包含する (Neurath, 1959:286)。しかし、法則の探究は目的それ自体ではない。「科学的態度をとるものにとって、科学的言明・法則は予測のための手段でしかない (Neurath, 1973:326)。」そして、科学について一般的に言えることは社会学についても当てはまる。他の諸科学同様社会学は予測のために役立てられる関係をつきとめる (1959:393)。しかし、法則が予測という目的のための手段であるとすれば、予測は社会計画というさらに上位の目的のための手段となる。「従って、未来

の社会構造の予測、所与の社会構造の機能の予測は、生活設計の核になる(1973:403)。」

マルクス主義は最も科学的な社会学であるとノイラートは語る。「厳密に非形而上学的な物理学主義の社会学を作り上げようとする全ての試みの中で、マルクス主義が最も完全である(1973:349)。しかし、ノイラートはマルクス主義者であるだけでなく、社会主義者でもあり、集権型計画社会の推進のために、情熱的にとは言わないまでも活動した。第一次世界大戦下の経済計画を親しく体験したことによって、彼は多分中央計画の将来にかなり楽観的な展望をもったのであろう。「我々は、現在、生活を意識的に作り上げていく時代に生きている。」少なくとも経済生活においては(1973:150)。

生活秩序の大部分が目的志向のやり方で作り上げられ、特に生産と消費量は決定され、制御される。たとえ習俗や道徳、宗教や愛にまで社会工学を拡大できなくとも、或いはそこまでいられなくとも、という結論に我々は達している(Neurath, 1973:151)。

既に見たように、実証主義の社会学はヨーロッパに起源をもつ。しかし、20世紀では、アメリカにその強烈な支持者がいる。もっとも、19世紀には既にウィリアム・グラハム・サムナーという明らかに例外である人物を除いて、アメリカ社会学は強い改革熱にうかされていた。「社会学が初めてアメリカにきたときは、社会改良のクルセードに似たものであった。(Lazarsfeld, Reitz, 1975:1, Parsons, 1959:550, Coleman 1979:682を参照。)20世紀初めに、アメリカ社会学はプラグマティズムと行動主義から、遅れて操作主義からも科学主義と社会工学の方向に強い刺激を受けた。

プラグマティズムはチャールズ・サンダース・パース、ウィリアム・ジョーンズ、ジョン・デューイらに作られたものである。アメリカの典型的思潮であるプラグマティズムは、「行動と有用性の美化を伴った、アメリカの強大なビジネスの理想化である」としてしばしば非難される

(Thayer, 1970:12)。その真偽はともかく、プラグマティズムは確かに行動の哲学であるし、仮にビッグ・ビジネスにおいてそうでなくとも、少なくとも研究では、とりわけ科学的研究では行動の哲学である。プラグマティズムの最も重要な点は、我々の概念の真偽、及び一又はその意味するところは、それらの観念が我々の行為に如何なる影響を及ぼすか、ということにある。パースの有名な法則・格率によれば、「実践的な意味をもっているものと考えられ、我々が概念の対象として持っていると考えている効果を考察せよ。そうすれば、これらの効果についての概念は、対象に関する概念全体になる(Pierce, 1957:42)」。ウィリアム・ジェームズは、プラグマティズムという言葉を初めて紹介した。彼によれば、プラグマティズムを特徴づけるものは、「具体性と的確性、事実と行為、権力への志向性である」(James, 1963:25)。また、ジェームズは「従って、理論は我々が謎としようものに答えることなく、道具になる」と宣言することで、道具主義に片足のせているのである(1963:26)。

三番目の代表格であるジョン・デューイによれば、プラグマティズムは道具主義と実験主義に当然のように結びついている(1970:23ff)。そういうものとしてプラグマティズムは最も重要な「自然科学の自己反省」という表現を示す(Habermas, 1971a:113-39)。しかしながら、プラグマティズムは、応用という点において自然現象に限定されず、社会生活の哲学として最も影響力があり、救いへの真実の道として科学主義と社会工学の福音を伝えるのである。「人間事象に関する事柄に科学的な態度を一般にとることは、道徳、宗教、政治、産業において革命的な変動に他ならないことを意味する(Dewey, 1962:155)。」しかし、デューイはプラグマティズムがアメリカ人の生活の仕方の美化を含むということには強烈に否定した(Dewey, 1970:25)。それはそれでいくぶん当たっている。彼自身は粗野な個人主義を痛烈に批判し、社会主義者に共感さえもっていた。彼は社会計画の闘士として登場する。

我々は、社会主義が我々の好みにより、どのような名をつけられようと、また実現された際に何と呼ばれようと、ある種の社会主義といったものを経験せねばならない。経済的な決定論は、今では事実であり、理論ではない。しかし、金銭的な利益を得るために行われるビジネスから出てくる、盲滅法の混沌として無計画な決定論と、社会計画と秩序的な発展という決定論との間には違いがある (Dewey, 1962:11-20, Dewey, 1963を参照)。

プラグマティズムはアメリカ社会学とりわけロバート・E. パークとW. I. トーマスらに代表されるシカゴ学派に莫大な影響を与えた (Morris, 1970:168-73; FisherとStrauss, 1979:461)。さらに、この影響は、社会学者、或いは社会心理学者、そしてプラグマティズムの哲学者でもあったジョージ・ハーバート・ミードにより直接仲介された20世紀初期のアメリカの社会学者の多くは、一般的にデュイほどラディカルではなかったが、社会生活の統禦と改良における科学の役割に関する彼の見解を共有していた。その典型的な楽観主義者は、W. I. トーマスである。

物質的な事実の領域から合理的技術により得られた驚くべき帰結は、我々が社会的事実においても、ほぼ同じ手続きをとるようになったということである。自然界の制御に成功したことで、ついには同じやり方で社会をも制御できるようになると自信をもった (Thomas, 1966:37)。

しかし、科学主義と人間工学は、心理学により強力な表現を見出せた。行動主義は、人間的な現象への自然科学のアプローチと人間行動の制御のための、これまでにない徹底したプログラムである。行動主義は、実証主義・プラグマティズム・行動主義・操作主義の各領域相互の交配を通じて、社会学に科学主義と社会工学を広めることにも貢献した。その創始者、ジョン・B. ワトソンによれば、行動主義は「人間の適

応の全領域を扱う自然科学」である。しかし、行動主義の究極の目的は人間行動の制御にある。

人間がなすことについての行動主義者の関心は、観客以上のものである。物理学者が自然現象を制御し、操作することを望むように、行動主義者は人間の反応を制御することを望む。人間の活動予測し制御できるようにすることが行動主義心理学の仕事である (Watson, 1970:11)。

アメリカ社会学の実証主義を形作る第三の勢力は操作主義である。その教義によれば、概念の意味は、概念が意味するものを測定する際になされた操作にある。操作主義は、社会学のソフトなデータをハードなデータに変換し、最終的に社会学を真の科学に変えるために、必須の測定理論をあたえてくれた。或いは、少なくともそう考えられている (Blalock, 1968:6-13)。操作主義を最初に採用した社会学者の中にシュタート・C. ドットとジョージ・A. ランドバーグがおり、後者は広範囲に及ぶ社会工学の主張者でもあった。『科学は我々を救えるか』 (Lundberg, 1947) という問いに対して、彼は躊躇せずにイエスと答えた。

ランドバーグによれば、社会科学がこれまで我々の時代の逼迫した社会問題を解決できなかったのは、社会科学が十分科学的ではなく、また、科学本来の性質を示す機会が与えられていなかったことによる。しかし、十分な時間と的確な試みがなされれば、社会科学は永遠の祝福とはいわないまでも、少なくとも今以上の平穩を与えるだろうと、ランドバーグは確信している。必要なのは統一された方法である。「この統一されたアタックの方法は、現代自然科学のそれではなければならない。それらの方法は人間の思想や感情、「精神的な特徴」を含む人間社会に十分に適用される (1947:13)。社会学者の仕事は天気予報官の仕事に例えられる。社会学者の仕事は、「社会情勢を高い確立で予測することであり、——より明確に言えば、社会学者は、一定の条件でどうということが社会に生じやすい

かをいうことを、予測できなければならない(1947:30-1)。「社会情勢」を予測する社会学者の能力に関して、ランドバーグは、明らかに楽観的だが、これは主に、意見や態度の観察や測定のための新しい道具・方法が、近年発達してきていることによる(1947:22-3, 37, 100)。

第二次世界大戦以来、正当な試みではないにしろ、少なくとも社会学と社会科学に、政治家や他の実践家に対して、自身の有効性を示す機会を与えられる状態が生じている。福祉国家の勃興に伴い、社会学者は貧困や犯罪、その他の悪化した社会問題に近年取組み始め、将来研究の様々な計画機関やセンターの職員として従事している(Parsons, 1959:555, Mills:1970:104, 108, Coleman, 1979:697)。もちろん、これまでの社会学者の「有用性」を正当に評価することは難しい。また、将来の潜在的な有効性を判断するには時期尚早でもある。しかしながら、率直な印象としては、社会学はランドバーグが与えた約束を十分満たしているとは言えない。社会学者は情報源としては実践家にとってかなり価値があるだろうが、他の社会学者同様行為の導き手としては貧弱である。

一つには社会学という経験の増加の帰結として、また、批判的な声の増加に対応して、社会学の主張者は、社会学理論の適用に関わる多くの問題に徐々に気づき始めている(Gouldner, 1965;或いは、Grazer, 1967を参照せよ)。どの社会学理論をどの問題に適用するかという問題。また、実践的な問題を調査の問題に変換する問題。調査結果と行為への指針との間の不可避的なギャップ、最終的には社会学者と彼らのお客との利害葛藤として表される価値の問題がある。社会学者自身が、何人かのお客の望みに答えることができないことを自覚しているといったこともある。さらに社会学に含まれる問題に徐々に気づいてきたため、社会学の研究の対象として社会学理論の適用の過程、社会学の知識の有効性について関心が高まってきた。この過程はコンサルタントとしての社会学者と彼らの顧客との関係から分析され、定式化の問題からアセスメントや実施まで連続した段階から構成され

ている(Zetterberg, 1962:9-22, 135以下, Lazarsfeld, SewellとWilensky, 1967:Ix-xxxiii, LazarsfeldとReitz, 1975)。

最後に、社会学の理論的基盤において、新しい方向づけをする議論がなされるべきである。20世紀前半では、科学主義と社会学の闘士たちは、分析的個別的な社会理論を好む傾向があり、「漸次的」「累積的」社会学を主張する傾向にある。20世紀後半、社会現象の相互関連に気づき、その結果、社会現象が生じる大状況を離れた社会問題の解決は無駄だと認識され始めている。この方向転換は、理論としては1960年と1970年に社会科学におけるシステム理論やシステムアプローチの流行として表れた。システム理論は社会や世界をひとつのまとまりと考え、「全体主義的」「ユートピア的」工学を擁護する。世界システムは言うまでもなく、理論的にも実践的にも巨大な社会システムの複合性を理解するために、システムアプローチはかなりの程度コンピューターに依存している。システム理論とコンピューター技術の結婚は、当分の間、権力者に我々が直面する事態の重大性に気づかせるという賞賛すべき目的をもって、世界とその諸資源の展開を長期間にわたって予見する数々の意欲的な試みに帰結した。

社会学における実践の危機

二章において、ウルフ・ヒンメルストランドは、社会学にける危機の側面—社会科学における科学主義の批判、或いは、自然科学のアプローチを指摘している。社会学における理論と実践を扱うこの章では、社会学における危機の他の側面—政治イデオロギーの側面に焦点をあわせることが重要である。

社会学の危機についての二つの著名な研究—アルビン・W・グールドナーの『迫りくる西欧社会学の危機』、ロバート・W・フリードリックスの『社会学の社会学』で指摘されているように、講壇社会学への挑戦は広い意味での「ラディカル社会学」、とりわけニューレフトからもたらされた。これが、社会学の危機の分析が、

社会学の社会学という形態をとるようになった理由である。問題とされたのは、社会学理論の妥当性や価値だけでなく、社会学の用途や社会学者の役割をも問題にしたのである。危機の最も直截的な表現は、批判者がよりポリティカルになっているという意味だけでなく、講壇社会学の隠れた政治的要素を剝出しようとしていたという意味においても、社会学の政治化と言える。講壇社会学は、福祉国家－西欧の戦争国家の支配的なイデオロギーであること、社会学者はそのような国家の番犬の一匹であることが暴露された。その激烈な攻撃のひとつが、カナダの社会学者マーチン・ニコラスからなされた。

政治権力の幹には多くの枝がある。それらのひとつに社会学の職能組織－アメリカ社会学学会がある。この枝の上部の太い部分は、契約という糊で、継ぎ目なく行政・経済・軍の統治権に接ぎ木され、それらで幹ができていく。そこから組織は制度的な足場に沿って四方に伸び、社会的事実についての権威主義的な見解を、大学や短大、高校へと伝達するのである。一般的に社会学という職業には、宣伝を普及させるという機能に加えて、産業界、行政、軍の首脳部が、決まった体制内でのある職種の集団を制御するという問題に解決の手助けしたり、行政体の官僚機構に入ろうとする学生に準備教育をするという特筆すべき機能がある。現にある統治体の正当化の源として、血と労働、税の貢ものを臣民から取り立てる過程を洗練する実験室として、今日の社会学職能組織は、創始者の憲章を具体的に実現する (Nicolaus, 1972:45-6)。

グールドナーとフリードリックスは、両人とも講壇社会学の重要な表現をタルコット・パソンズの機能主義に見出す。この理論は実際のところ、共通の価値から導きだされた秩序と、利害の一致からくる均衡の状態に主要な関心があり、既存の社会・政治体制を確立するイデオロギーを与える (Gouldner, 1971, 2巻, Friedrichs, 1972:14ff)。従って、危機におけ

る重要な要素は、利害の一致よりもむしろ権力、闘争、疎外を強調する、競合する社会学理論の発展にある。社会の異なった集団間に利害の対立がある場合にのみ、ラディカル社会学の問いを問うこと－「誰の立場に立っているのか」－は、意味あることではないだろうか。(Becker, 1970:15-26, Mills, 1970:86も参照)。しかし、ラディカル社会学は、それぞれに異なった現象を示す。従って、上述の問いは、問う者によって異なった意味がある。ベッカーからの引用は、官の方についているのか、それとも負け犬のほうかという意味がある。もちろん、ニューレフトの事実上の立場では、上記の質問は階級闘争の立場に立つそれである。

講壇社会学の支配的なパラダイムをパーソンの構造機能主義と同定することは、凡そにおいて当てているが、危機の最も重要な側面－ビジネス、官僚制、国家の利害に従属する者、或いはアドバイスを行う者、専門職、社会的な技術者としての社会学者の役割についての批判－から目をそらしてしまう。社会学者が徐々にこの役割を肯定するようになってきたという事実が、講壇社会学者に対するニューレフトからの攻撃的になったのである。しかし、一般的に理解されているように、構造機能主義は社会学の技術に貢献してこなかったし、その意図もなかった (Mills, 1970:59, 131-2, Gouldner, 1971:151-7)。社会学に強い推進力を与えたのは、講壇社会学の別の枝、「システム論的」或いは「抽象的な」経験主義であった。

C. ライト・ミルズが著書『社会学的創造力』で講壇社会学の二つの部分、グランドセオリー (構造機能主義) と抽象的な経験主義を見抜いたことは彼の功績であった。既に見たように、20世紀には社会学が、とりわけ経験主義傾向をもつ社会学者によって吹聴され、持上げられた。経験主義的な社会学の方法、技術、理念は社会学の要求に特別うまく適合しているように見える。第一に、人々に関する膨大なデータを集め、彼らの状態や条件に干渉するために必要な知識を与える。次に法則的な知識の理念があり、そのような知識に基づいた予測の理念が

あり、それらは人々の操作を可能にするために得られなければならない (Mills, 1970:113-32)。

繰り返しになるが、社会学における危機は、社会学の認知的価値、或いは「真理」についてと同じく、社会学の使用、社会学者の役割についても生じている。ラザースフェルドにとって単に社会学者と顧客との関係に見えたものが、ラディカル社会学にとっては、イデオロギー上のコミットメントを含む政治的な関係に見えるのである。講壇社会学が社会学者を社会の外に位置づける——単なる観察者——傾向があるのに対して、ラディカル社会学は社会学者を一人の市民としてだけでなく、社会学者という能力をもつものとして、社会というドラマに参加していると主張する。講壇社会学はウェーバーに従い、社会学者を二つのパーソナリティを持つもの、異なった役割を分けて演じられるものとして描くが (Coleman, 1979:689-91)、ラディカル社会学は社会学を作ることも社会的実践になり、意図したにせよ無意識にせよ、社会的現実を作ることに手を貸しているのだと述べる。従って、社会学者は、社会の中立的な僕者のふりをして、職業という役割に隠れることができない。しかし、自分たちの研究の用途には、責任を認めねばならない。グールドナーの「自己反省の」社会学の要請や (Gouldner, 1971:481-512, 1957:77-81, 82-127, 145-50) フリードリックスの「対話としての」社会学の訴えも以上のような考察を踏まえている (1972:317-28)。

そして最後に、ラディカル社会学は、社会学の価値中立性に疑問を投げかける。他の科学同様社会学理論の価値中立性を認めることと、社会学を用いること自体が、価値中立から外れている。しかし、ラディカル社会学はそれ以上のものであり、社会学理論それじたいの価値中立性に疑問を投げかける。ヒュームの有名な格言、「べき」は「である」からは導きだせない——を認めつつも、ラディカル社会学は、没価値的な社会学という支配的なドグマを単なる神話として否定する (Gouldner, 1975:3-26)。ラディカル社会学者たちは、存在から当為を導きだす論

理的障害があるにもかかわらず、社会学がイデオロギーに影響された幾つかの過程を発見している。ここでこの難問に深入りはしないが、社会学におけるイデオロギー的危機に関して重要な研究をなしたものについて、若干述べておく。

社会学における危機を示し、その要因とさえたった最も重要な著作は、おそらく既にあげたC. ライト・ミルズの『社会学的想像力』であった。ミルズは伝統的な社会学のふたつの主要な使われ方—イデオロギー・官僚制—を見抜き、初期には前者の形態が、現代 (出版年は1959年) には、後者の形態が主流になる傾向があることを示した。官僚制的な社会学の用い方に関する彼の分析は単刀直入である。それは、官僚制の中にいる顧客が持ついかなる目的であろうとも奉仕するようになり、それによって官僚制支配を広めることに貢献する社会学者のことを言っている (Mills, 1970:114)。社会学のイデオロギー的な用いられ方に関しては、それが社会学者により作られた理論と、社会が自らの特質について持つイメージや観念との関係についての問題であることを指摘した。社会学理論は二つの点においてイデオロギーであろう。権力の配置機構を正当化したり、権威と権力の問題から注意をそらしたりすることで (1970:92)。

しかし、社会学理論は批判でもある。「既存の制度や支配者を批判し、その正体を暴露することで、社会学理論はその権威を剥ぎとる。(Mills, 1970:92)。」これはミルズやラディカル社会学者一般に好まれる社会学の用法である。ミルズの批判社会学の最も重要なテーマは権力と疎外である。孤立化された生産法、政治支配や現代社会の世界的混乱を覆い隠す技術の分析が、現代社会学の特別な課題である (1970:20)。しかし、この課題に取り組むものとして、社会学者は官僚制へのアドバイザーとしての役割を放棄し、独立した知識人としての役割を認めねばならない (1970:198-200)。

ラディカル社会学にとって着想のもう一つ重要な源は、フランクフルト学派の「批判理論」であった。危機の最初の段階においてとりわけ重要なものが、ハーバート・マルクーゼの『一

次元の人間』であった（初版は1964年に出版）。この著作の中心テーマは、技術が様々な目的の中立的・合理的手段の達成に留まらず、支配の非合理的な道具に変わってしまい、技術それ自体がイデオロギーの新たなる形態に変わる段階までに、技術が進んだことにある。この含意は、官僚制的な社会学の用法、或いは、技術的な社会学の用い方と言ったほうがよければ、これもイデオロギー的なのであり、何に対して用いられるかだけでなく、用いることそれ自体イデオロギー的である。

この全体主義的特徴を持つ社会の外観では、技術の「中立性」という伝統的な観念がもはや維持されない。技術は使われる対象から分離されない。テクノロジーの社会は、既に概念と技術の構築において操作されている支配のシステムである（Marcuse, 1966:xvi）。

技術的な現実の構成のやり方には、純粹に合理的・科学的な秩序のようなものはない。技術的な合理性の過程は政治の過程である。換言すれば、技術は物象化という巨大な入れ物—その形態において最も成熟し、効果的な物象化—になった。個人の社会的な地位と他者に対する関係は、客観的な性質や法則によって決定されているように見えるだけでなく、これらの性質や法則はそれらの神秘的で制御しがたい性質を失っているようである。それらは科学的合理性の計算可能な表象として現われる。世界は全体的な管理というしろものになっていく傾向があり、それらは管理するものをも飲込んでいく。支配の網の目は理性の網の目そのものとなり、世界はその中に必然的に絡められている。そして、思想の先験的な形態は理性そのものを超えているように見える（Marcuse, 1966:168-9, Marcuse, 1966を参照）。

この全体的な管理の世界は、他の全ての選択肢、可能性、潜在能力を捨て去るという意味で一元的である。しかし、この世界についての思

考も一元的である。一元的思考は否定的、批判的思考の余地を残さない一方、存在と当為を包括する真に弁証法的な思考を肯定する（Marcuse, 1966:123-43）。

現代の批判的理論を代表する最も影響力のある人物は、ユルゲン・ハバーマスである。マルクゼが現代の思潮において、理性と合理性を同一視することを拒絶したところで、彼は、マルクゼが技術的なものと実践的なものを混同していると批判する。しかしながら、ハバーマスは技術的な理性をマルクゼほど批判しない。マルクゼが、現在の形態での技術を全面的に拒絶し、あたかもそれに代わるものがあると示唆していると思われる部分で、ハバーマスは、労働の基本的な範疇に根ざした道具的な理性と目的合理的な行為の表現として、技術に適当な位置を与えた。現代世界のように、相互行為の基本的範疇に位置付けられるコミュニケーションの領域においても、技術が優位を占める時のみ、技術は支配のイデオロギーに変わる（Habermas, 1971c:81-122）。

ハバーマスによれば、我々の時代における技術的理性と技術的意識の典型的な表現は、システム理論である。実証主義やプラグマティズムのように、システム理論はコミュニケーション的行為の真に実践的な問題を無視し、目的合理的行為の単に技術的な問題にのみ着目する。社会システムの組織や制御は、システム分析のアプローチに含まれている。さらに、この全体主義的アプローチは、干渉国家の目的計画に特に適合する。したがって、システム理論は進化した資本主義の新たな政治形態のイデオロギーである（Habermas, 1971b:232ff.;1971c:106-7; Boguslaw;1965:1-46,181-204）。

ハバーマスは、知識を構成する利害関心の分析の一部として、技術的なものと実践的なものの相違を考える。しかしながら、技術的・実践的な知識を構成する利害関心の他に第三のもの、解放を目指すものがある。実証主義・プラグマティズム・システム理論が技術的なものの典型的な表現であるならば、実践・批判理論の解釈学は解放の認識的関心の表現である。

社会的行為のシステム科学、つまり経済学・社会学・政治学は、経験的な分析科学と同じ法則的な知識を作り出すという目的を持っている。しかしながら、批判的な社会科学はこれに甘んじてはいないであろう。理論的言明が、このような社会的行為の不変の法則性を把握した時、そして原理上変換可能な従属関係を、イデオロギー的に固定化して表現する時に決定されるこの目的を越えることに、批判的な社会学は関心を持っている(Habermas, 1971a:310)。

批判的な理論家は、イデオロギーに反対するような理論をもって任じているが、実践に関しては同じような見解を持つ。イデオロギー同様、彼らは独立という価値をいとおしみ、社会的ドラマの観察者であり続けることを好む。しかしながら、重要な相違はある。批判的理論家は、社会生活に全く関与しない観察者ではない。典型的なイデオロギーと異なり、彼は、中立的だという幻想を抱いていないし、中立的であることを目指さない。彼は基本的に全ての支配形態に反対し、既存の支配形態から解放する側についている。批判的な理論家は、理論化も実践であり、社会学者も社会学者としてさえ社会生活に参加していることを完全に意識している。

しかしながら、社会の異集団間の紛争や抗争に、活動家として直接参加することを望むラディカル社会学者の中には、それ以上のことを望むものもある。これは正統的なマルキストにとっては当然のことであるが、マルクス主義は理論と実践の統一体であり、階級闘争における革命の武器である(Althusser, 1971:7-22; Therborn, 1980:37-42)。それ以外のラディカル社会学について、マルクス主義を学んでいようとまいと、社会主義に共感していようとまいと、このような事情は必ずしも単純なものではない。彼らのうちのあるものは、ウェーバーが用いた意味での社会学者と一市民という役割の分離を好むであろうし、正統派マルクス主義者以外にも活動家であることを望むものもある。このような社会学の探求—基本的人権を認められず、

抑圧されたものの権利拡大に直接貢献することを意図し、解放のための闘争の一部である—を「アクション・リサーチ」と呼べるだろう。このように認識されたアクション・リサーチは、下層階級からのリサーチであり、したがって、上層階級からの技術的な社会工学に反対する。

参加型のアクション・リサーチとは—意図された行為の意味について、調査者同様に行為者を啓蒙していく調査者と、行為者との対話によって特徴づけられる理論・調査・実践の分離できない結合である。そして、ついには調査者との関係において行為者の自律性を増す結果になり、現実の所与の秩序という必然性の中にある虚偽の抑圧された信念から解放される(Himmelstrand, 1982:44)。

純粋社会学と応用社会学との伝統的な区別と、講壇社会学とラディカル社会学との相違を結合させて、ラディカル社会学にみられたように、社会学者の異なった役割を图示してみる。表1参照のこと。

表1

	講壇社会学 (保守的)	ラディカル社会学 (解放的)
純粋社会学 (観察者)	イデオロギー	批判者
応用社会学 (参加者)	テクノクラート	行動主義者

最後に、講壇社会学が別の点でイデオロギー的であるということ述べておかなければならない。講壇社会学は、人間がロボットか外的な力にのみ従属して自分自身の意志を持たないかのような見解を、明らかに、或いはそれとなく助長する傾向がある。このような人間に対する見方によって、人は自らの自律性と責任を失うのである。また、このような見方は、我々が自然の物体を扱うと同じように、制御され操作される対象としてのみ人間を扱うことを正当化する

る。これに対して、ラディカル社会学は人間を主体として、自ら作り上げた意味や価値の世界に生きる自律的な存在としてみる考えを擁護する。「ラディカル社会学」は、このグループで用いられているように人間主義的な社会学である (Friedrichs, 1072:223-58; Berger, 1963: 122-76, Macdonald and Pettit, 1981:55-105)。さらに、科学主義に反対してラディカル社会学の側についたマルクス主義は、人間主義的マルクス主義であった (Friedrichs, 1972:259-87; Fromm, 1966)。アルセチュールと彼の後継者の構造主義的マルクス主義者たちは、そういう立場をとらなかつた。

危機の時代における科学主義

前節で述べた社会学における危機は、社会学の応用や用途に大きく関わることであった。しかし、それは社会学理論の方法論や基礎に關しての危機と同じか、或いはそれ以上の危機でもあったのである。応用を成功させるには、特定のタイプの知識を前提にするが、この双方の危機が関連していることはいうまでもない。より明確に言えば、社会工学は、科学主義を前提とすることを通常假定されている。しかし、科学主義、或いは社会科学に対する自然科学的アプローチも挑戦を受けてきたのである。社会学における危機の一つの重要な要素は、対抗するアプローチが数多く現われてきたことであり、それらの殆どが解釈社会学の類いに好意的である。社会科学における計量・法則的知識・予測の可能性について、疑問が投げ掛けられた (Luckmann, 1973 参照)。

しかし、社会学における科学主義に限界があるとすれば、それには二つあろう。それは程度の問題であるかもしれないし、性質の問題であるかもしれない。科学主義の危機をめぐる最も一般的な主張は、二つの相違は性質の問題であるとする。二つのケースが分けられよう。一つは解釈学の主張であり、社会科学と自然科学との間には、方法論の不連続性、ないしは二元論がある。もう一つは現象学の少ききつい主張で

あり、この方法論の二元論は、研究の題材の側に本質的な相違があることに関連する。解釈社会学の基本的な出発点は、社会現象は意味を含んでおり、したがって、社会学の第一の課題はそれらの解釈に達することである。しかし、社会現象は既に社会構成員によって解釈されている。そのため社会学者は二段階の解釈、或いは「二重の解釈」に従事している (Giddens, 1976: 79)。社会学の概念は「第二級位」の概念である (Schutz, 1945:267-9)。理解社会学のこの主要な前提から、殆どの正統派社会学の科学主義に対する批判が出された。

批判の第一点は社会学における計量化の可能性に関わる。科学主義の批判者——とりわけ象徴的相互作用論者とエスノメソドロジストは、一般に、現象を恣意的に計測するか、極度の歪曲なしには、社会現象は計量化や正確な測定に不向きであると論じている。計量化は自然科学同様「ハード」なデータを必要とするが、社会学のデータの大部分は、質的、或いは「ソフト」なデータである (Filstead, 1970)。

社会学における測定 (計量化も含む) に対する意欲的な批判は、アーロン・V. シクレルの『社会学における方法と測定』(1964) である。シクレルによれば、社会学の概念の正確さの欠如と、その適用について明確なルールを欠くために、社会学の測定は恣意的なものになる (1964:13-14)。それは文字通りの測定というよりも判断を加えた測定になる。社会学でいう測定の大部分は日常生活の常識的世界に関わる。従って、第一に要請されるのは、我々の日常的文化の共有された意味の分析である。しかし、そうであっても問題は多い。測定するためには社会現象を分類する同値類を確立することが前提になる。しかし、社会現象は一過的なもので、変動する社会条件に左右される。

私は、安定的なもの、蓋然的なものを含めて、社会的行為の明確に述べられていない特徴に注目してきた。なぜなら、それらは、社会学者が用いることができる方法論の装置では、測定困難であるからである。行為者の社

会現象についての認知や解釈が恒常的であるという点に依拠して、日常生活の一定の形式的な諸特徴が測定されていることを述べてきたが、特に日常生活の言明されない条件は、かなり未確定のものがあるので、現在使われている測定システムに深刻な疑問を投げ掛ける。また、日常生活の形式のあるものは、社会生活のインベティブな要素のために、正確には測定されないということも指摘しておいた(Cicourel, 1964:221-2)。

一般的に測定にあてはまるものは、必然的に計量化にもあてはまる。

用いられるデータが数値で表されるか、より科学的なものと考えられるために、変数を量としてみることは、測定の問題に対する解決にならず、むしろ恣意的判断による測定を支持することでその問題を避けている。恣意的判断による測定は理論構造の検証や再検証の代替にならないので、結局社会上の事物や出来事の特徴を観察したり、記述・測定したものは、社会的リアリティの構造と信じられているものにそのまま一致するだけである(Cicourel, 1964:33)。

シクレルによれば、社会現象の測定と計量化の最終的な結果は、変動する社会的リアリティを理論的に「物象化」することである。(Cicourel, 1964:33)。

シクレルに示唆された問題は、伝統的な社会学の経験主義者たちに知られていないわけではなかった。それらは伝統的な社会学の用語では、信頼性と妥当性の対の問題として、とりわけ妥当性の問題として言及されていた。測定道具の信頼性ということで意味されることは、同じ現象を繰り返し測定したときに、同じ結果を生み出せることである。測定道具の妥当性ということで意味されるのは、測定することが予め意図されているものは何であれ測定できるが、それ以外のものは測定できないとすることである。周知のように、測定の理論は、社会学の経験的

な方法論の中で最も弱い部分である(Lazersfeld, 1962:467-73; Blalock, 1970:87ff; Hauser, 1969:126-8)。そして、測定の問題、特に妥当性問題はしばしば無視された。

エルブィン・ドイッチャーが指摘したとおり、調査研究が巨大産業になる前に、人々が言うこととやることには普通大きな差があり、逆の関係があることさえある、と知られていた(1970:29)。そうであっても、社会学者は信頼性の問題にまず関心があり、妥当性というもっと根本的な問題には関心を持たなかった。

社会科学における科学モデルの採用は、信頼性の問題に中心を置く方法論についての異常な関心を生み、それに伴い妥当性の問題を無視するという結果になった。我々は面接者間の不一致、或いは種々の調査道具の不一致から生じるエラーを測定することに没頭していた。また、我々はたいして気にもとめずに、我々が一致しているもの、或いは一致して正しいか悪いと考えているもの、これらの一致に重点を置いた。その結果、最大限の正確性で、いかにしたら間違ったコースを辿れるのかについて多くを学んだのである(Deutscher, 1970:33)。

ドイッチャーは、社会学者の間で調査研究が流行っているのは、データの悲惨な状態にも拘らず、相対的に単純であること、廉価であり、科学的な性格を持つように見えるという点からやられているのだと説明する。社会学者は、調査によって科学者のコミュニティに成員権を得るだけの尊敬を受け、それだけでなく、政治的な援助の資金源に近づくことができる。

それに関して、主にこの状況に対する二つの反応が可能である。シクレルが行なったように、測定道具を、特にそれらの妥当性を改善する様々な方法、或いは計量的な研究から退却を提案することもできる。このことをグレザーとストラーズは有名な『基礎理論の発見』でおこなった(1967)。彼らによって提案されたもう一つの道は、質的調査に絞った研究を増やすことで

あった。伝統的な経験主義の社会学では、質的分析は仮説のテストを目指す真の科学的な計量分析の単なる準備段階と考えられていた。彼らの議論において、質的調査が量的調査以上にとまで言わないにしろ、同様に科学的であることを正統に主張できるとした。この主張の根底にあるのは、質的な研究は新しい実質的な理論を発見することを目指し、それに対して量的調査の主要な前提事項は古い理論の確証にある、ということである。質的調査が体系的でなく、印象的で探険のようなものであるとして同じような批判がされるが、それに対して彼らは、量的分析は洗練されすぎることから不利益を被っていると言い返す。量的分析は決まった形を持たず、転変きわまりない社会的事実と静態的なカテゴリーやあまりにも整った測度を押し付ける。他方、質的分析は基礎理論の発見を目指し、実際の生活の変化を綿密に調べあげてそれを導き出す (Glaser Strauss, 1970:223-303;1967:1-19, 223-35)。

計量化と測定を取り巻く問題は、社会科学の概念に関わる広範囲な問題、究極的には社会的事実の或種の蓋然的特徴の表現である。アリストテア・マッキンタイアにより議論されたことは、社会科学の概念は自然科学の概念とは異なり、「本質的論議可能性 (essential contestability)」として表現される。マッキンタイアの議論は、経験的な概念の「開いた構造 (open-texture)」と、その結果としての「本質的不完全性 (essential incompleteness)」について、フリードリヒ・ヴァイスマンの議論を洗練させたものである。経験的な概念は、全ての方向において限界が定められているのではなく、開かれた地平に拡大されている (Waismann,1968:38-9)。社会的概念は本質的に不完全であるだけでなく、本質的に競合するものであるというマッキンタイアの示唆は、社会科学では概念の用法について暫定的、或いは一時的な合意すらないという観察から導かれたものである。彼は社会的な概念の特徴を、社会的な現象、制度、実践は、人々が心に抱く信念によって、部分的に構成されている事実として描いた。周知のように、信念は

競合する (Macintyre,1973:1-9)。

同じような見方が多くの社会学者から表明されている。例えば、ハーバート・ブルーマーは、社会科学の概念は曖昧であり、必然的にそうならざるをえないと指摘した。彼以前には、ミードがそのことを述べている。

現在、社会理論における概念が、悲惨なほど曖昧であることは明白である。モーレス・社会制度・態度・社会階層・価値・文化的規範・パーソナリティ・準拠集団・社会構造・第一次集団・社会過程・社会システム・都市化・適応・差別 (differential discrimination)・社会統制といった代表的な術語は、経験的な例を明確に描き出せない。荒っぽい定義をするのがせいぜいで、そのような雑な特定化では、何がその概念によってカバーされ、カバーされないのはどの範囲なのか決定できない (Blumer,1969:144)。

ブルーマーは、社会的概念をより明確にする様々な試み、とりわけ操作主義について議論を続けているが、それらの概念の曖昧さは社会的事実の固有な特徴のためであり、従って直しようがないと結論づけた。社会科学における概念の殆どが、フィルムのようにある社会的事実を「感光」させるものである。それらに正確な使い方などないが、感光させるための道具としての機能、どちらを見るかといった方向を指し示す機能はある (Blumer, 1969:147-52, 171-82)。

近年の社会学において社会学的概念の蓋然的な特徴は、エスノメソドロジーの運動に参加する人々から強調された。しかし、ブルーマーが、この問題は社会的事実の性質に関係するという可能性の指摘にのみ留まった地点で、エスノメソドロジストはそれを第一の課題として、これらの問題の原因となる日常生活の特徴を正確に分析した。エスノメソドロジーは、社会的秩序をルールに支配された種々の慣習から構成されたものとする。これらのルールにより支配された慣習は、伝統的な社会学では所与の必然的なものとして扱われた。エスノメソドロジーは伝

統的な社会学と異なり、具体的な状況における社会成員の慣習をルールへの達成や適用と同じく、高次の蓋然性を持つものとみる。ルールの操作主義は、いつでもエトセトラの節を含んでいる。従って、それらの適用は、必ずその場限りの要素や体裁の要素を含んでいる。しかしながら、どのようにして人々が日常の活動をもっともなものにしているのかを発見するのは、エスノメソドロジーの中心課題である。彼らの著作から生じる社会像は、連続的に再構成され、状況に応じ変化するが、決して固定化されない。(Garfinkel, 1967:1-34, 1974:15-18; Zimmerman Pollor, 1974:94-103)

自己反省的であるために、日常活動の蓋然的な特徴は、発話と行為の状況依存性として社会学者に直面する。「状況依存表示性 (indexicality)」によって意味されることは、成員の発話と行為の属性である。それらは話者、或いはエージェントの成育歴や現在の状態に対する意味、話や行為がなされる社会的(言語的)脈絡での意味に基盤を持つ。発話や行為の状況依存性や脈絡依存性は、エスノメソドロジストにより、伝統的な科学的な社会研究にとって越えがたい障害になるとみなされた。状況依存的な表現を客観的なものに置き換えたり、言葉の厳密な意味での法則に達しようとする試みは、従って失敗するよう定められている (Garfinkel, 1967:2-7; Garfinkel と Sacks, 1970:337-66)。

社会学における科学主義に対する第二の批判点は、因果法則を確立しようとする試みにある。解釈学者や後期ヴィトゲンシュタインに発した日常言語哲学により、「社会的事実」は自然科学のなまの事実」とは違うことが議論された (Searle, 1969:50-3)。自然の領域において、事象は原因と結果として外的に連関するが、社会現象は内的に、概念的、論理的に連関する。従って、社会科学は法則的な関連を確立し得ないし、法則的な知識に達することができない。社会科学の目的は説明よりも理解にある(概観するのなら、Wright, 1971を参照)。

解釈学のテーゼには二つの立場がある。G. E. M. アンスコーム (1963:15-25; 1968) とア

リステア・マッキンタイア (1962) などに代表される第一の立場によれば、動機、理由、或いは意図からの説明は因果的でも状況的説明でもない。行為の動機・理由・意図の関係と行為それ自体は論理的関係である。

「ルールに従う」という考えを際立たせる第二の立場は、社会学者の間でかなり有力であった。この立場の最も有名な支持者であるピーター・ウィンチによれば、人間の行為が意味を持つのは、動機、或いは理由のために、または意図してなされたことによるのではなく、ルールをあてはめることによるのである (1958:45-57)。このテーゼは社会的事実の広範囲にわたる分析の一部をなし、社会学が到達し得ないような結果と、伝統的な方法に対する徹底的な挑戦を含んでいた。ウィンチによれば、社会的事実は生活の形態、つまりルールにより支配された活動から構成される。生活の形態は、概念や観念の表現により広げられる。従って、社会関係は概念、或いは観念相互の関係に似ており、それらは内的な関係である。この結果をもっと大きく見れば、社会学をやることは哲学に極めて近い活動になる。社会学の主要な前提は、社会的法則の探求よりも概念の分析になる (Winch, 1958:21-4, 40-4, 121ff.)。

ルールを通じて概念により社会的事実を解釈するというウィンチの分析は、社会制度はルールによって統制されているだけでなく、作られてもいるというジョン・サールのテーゼから支持された。それは、社会制度がこれらのルールを用いて記述され、定義されるのは、社会制度がルールによって構成されているからである。この点に関して、フットボールの試合や議会民主主義の機能を記述、或いは定義するには、それらのゲームを統制し、構成するルールを使ってやるしかない (Searle, 1969:33-5)。

最後に、第三の批判点は社会現象の予測可能性に関わる。これはここで扱っている問題の核になる。なぜなら、社会工学は、理想的には必ずしも計量化された法則でなくてもいいが、法則に基づいた予測可能性を前提にする。しかしながら、予測可能性は法則を前提にせず、むしろ

る別のところから導きだされる。

コントにより既に指摘されている通り (1975, 56ff., 222-4), 量化と数式化はかならずしも予測のために必要ではない。それは計量的な予測のために必要なのである。他方、質的な予測のためには、ある特定化された条件 ($C_1, C_2, C_3 \dots C_n$) のもとである、社会状態Aがいつでももう一つの社会状態Bを引き起こすか、同様に生ずるとする法則を知れば、十分に予測可能である。我々が、Aの状態にあって、条件 ($C_1, C_2, C_3 \dots C_n$) を生じさせる手段を持っているとすれば、状態Bが生じることを予測できる。しかしながら、前述した限界のある計量可能性の源は、予測を限定する。社会現象の境界が不明瞭で、社会学の概念が本質的に競合するようなものならば、予測は正確性を欠くだろう。例えば、仮に我々が「良い生活」といった曖昧な概念、或いは、それと似た「社会的有効性」「生活の基準」のような概念を持つことができないならば、それらの到来も、それらの実現の効果も予測できないだろう (Neurath, 1944: 34-7)。

因果法則は、社会学に必要であるにもかかわらず、予測に必要でない。予測に必要なものは社会的な規則性である。しかし、ヒンメルストランドが指摘するように (44-61以下) 社会生活における規則性は因果法則と同様ルールからも導かれる。それはウェーバーの主要なテーゼであり、社会生活の合理性と計算可能性の増大は、とりわけ官僚制の形態において、かなりの程度ルールによる社会生活の規則性が増大した結果である (Weber, 1978: 223, 1375-6, 1394; Udehn, 1981: 139-41を参照)。しかし、社会現象の計算可能性の増大は、道具的な合理的行為の汎化をも招いた。もし、我々が人々の目的を知り、彼らはその目的を達成するために合理的に行為するとみなすならば、かなりの正確さで行為の過程を予測できる (Weber, 1975: 120-9)。

次に、予測可能性は因果法則に基づいていることに加えて、ルールや行為者の意図にも基づいている。従って、科学的な予測 (わざと

「科学的な」という言葉を避けるが) と人間的な予測の区別をすることは好都合であろう。社会学者が、自然科学者が物理的な事象を予測するのと同様、ないしはかれら以上に社会現象の予測ができると主張するならば、彼らの予測は通常法則というよりも、ルールや意図についての知識に基づいているのである。葉が落ちる軌道を予測するよりも、人々の交通行動を予測するほうが簡単であるとすれば (Himmelstrand, 44以下)、或いは、天気予報を予測するよりも人々の知り合いとの行動の方が予測しやすいとすれば (Weber, 1975: 121), これは法則と意図についての常識的な知識のためである。これらの予測に因果的法則は何ら言及されていない。

しかしながら、言葉の厳密な意味で、「社会学」は、因果法則の知識に基づく予測を必要とすると言われるかもしれない。立法と法律の執行に基づいて社会を再構成するには、必ずしも因果的法則の知識に基づかない。しかし、社会と心理的な因果法則は法の制定過程において働く、或いは、これらの法則についての知識が制定者を助けることは否定できないが、法の制定を通じた社会の再構成、或いは、権力そのものが、法則の知識に基づいた工学とは基本的に異なった活動であることも否定できない。

要約しよう。仮に、科学主義の徹底的な批判者の多くが言うように、社会生活に因果法則がないということが真相であるならば、社会学は厳密には不可能になる。

この節では、科学主義の外在的批判に力点を置いたが、それは、社会学と自然科学は違う種類のものなのだという対抗するアプローチから得られたものであった。しかし、科学者集団のなかにも、社会学と自然科学は程度において重要な相違があり、程度の相違は、効果的な社会学に深刻な障害になると気づきはじめる気運がある。

社会学における予測の限界

社会科学の知識は、深刻な欠陥を被っており

(Brodbeck, 1968:290-6, 381-2), 社会科学の説明は通常不完全で単なるスケッチにすぎず (Hempel, 1965:238, 423-4), 結果的に, 社会現象の正確な予測は実質的に困難であるということが, 以前から科学者の側に立つ社会学者や哲学者たちにさえ認識されている。その理由は, 社会システムが開かれたシステムであるために, 実験に必要な人工的に閉じた空間を作り出すことが通常できないし, 時にはそうすることが倫理的に否定されるからである。そういうわけで, 社会科学では周知のように, 他の条件が同じであればという条項がしばしば使われる (Himmelstrand, 53-6以下)。

社会学の知識の不完全性は, (条件付きであれ, 無条件であれ) 決定論的法則に到達することができないことである。社会学における法則は, 殆ど例外なく確率論的な法則 (Nagel, 1961:503ff), 及び, 或いはまたは傾向として法則である (Homans, 1964:959)。

自然科学者の知識と比較して, 社会学者の知識が劣っていることを説明するために, 最も引用される理由は, 社会現象は自然現象より複雑であるということである (Comte, 1975:75-7, 87-102; Mill, 1950:308-9; Spencer, 1961:66)。しかし, エコロジカルシステム (Himmelstrand, 63-4以下), 或いは火 (Popper, 1961:139-40) のように, かなり複雑な自然現象に言及することで, 複雑性からの議論は何度か疑問視されている。両者の違いは, 社会現象, 自然現象それ自体に固有の相違というより, むしろ社会現象を実験的に扱う, つまり実験室の人工的な閉鎖空間に置くことが, 非常に困難であるということにからきている。

社会現象が自然現象よりも複雑であるかどうかはたぶん分からないが, つぎのようなことで, より複雑であるという考え方を作り上げているのであろう。自然の事象の説明には, 一つの事象に大きな影響を与える数多くの要素に言及しなければならないだろう。自然のシステムの中には, 社会システムと同じくらいに多くの部分に分かれるものもある。社会科学は一般的に自然科学よりもその説明に多くの変数を使う

(Hayek, 1967:22-42; Cohen, 1978:348, 351-6)。また, 社会現象が全ての自然現象よりも複雑ではないにしろ, 社会現象はいくつかの自然現象より複雑であるのは確かである。自然界には閉じたシステムでないものがあるとしても, 社会科学者たちには慰めにはならない。それは自然科学においても予測に限界があることを意味し, 工学にも同じく限界があることを含意する。しかし, 社会生活において工学が全く成功しなかったのに対して, 自然の領域において工学は予期せぬ域に達した。それはむしろ達成されすぎたと信じるものが多い。社会現象は特に予測しがたい知識である。ポッパーによれば, 知識が未来に増加すると予測するのは, 論理的に不可能である。なぜなら, 明日我々が知るであろうことを既に知っているという前提を設けているため, これは全く馬鹿げたことである。この議論はポッパー自身によって発展させられ, 歴史主義への反駁を同時に含んでいる (Popper, 1961:v-vii)。しかしながら, 同じような議論が既にノイラートによって進められており, 初めて社会学の予測に深刻な限界を示した (Neurath, 1973:403-5)。「車輪を発明できない国家が, どうして車輪を発明すること自体を予測できるのか。 (Neurath, 1944:30)」知識の未来の状態を予測するという問題は, 実証主義者にとっては, 社会科学と自然科学との程度の差にしか考えられていないが, 人間主義的社会学者には, 社会学的知識の自己反省と解釈されている。

ノイラートによれば, 社会学における予測の第二の限界は, 主張すること自体主張の実現の決定素になるということである (1973:405)。これは予言の自己成就とか自己破壊の有名な現象 (Merton, 1975:421-36), 或いはエディプス効果として知られていることに関連する (Popper, 1961:13-14)。人々が社会学者によって作られた理論や予測を知るようになると, そのことに関わる彼らの利益や権力に従って, それらの予測が実現するのを強めたり, 妨げたりする。実証主義に傾倒する者によって, 自然科学の領域にもこの現象のアナロジーがあると考えられている。特に, ハイゼンベルグのいわゆ

る「不確定性原理」と呼ばれるものである。しかし、このアナロジーはこじつけのように見え、予言の自己成就や自己破壊の重要な特徴を説明できない (Giddens, 1976:153-4参照)。ヒンメルストランドが指摘するように (44以下 60ff.), 自然科学者は「英語の分子について話すことはできないし、その言語の原子から応えを貰うこともない。これについてはどの言語であろうと同じである。このことに加えて、不確定性原理は素粒子の測定やそれに伴う操作に適用はできるが、他方予言の自己成就や自己破壊は、社会学理論や公表から帰結するのであるから、実験的な操作と何ら関係がない。同じような問題が社会学的な実験についても先鋭に表れる。

フリードリックスによれば、自己成就と自殺の予言は、社会科学に特有の「予言のパラドックス」を示す。「このような社会調査の活動を通して、社会的事実、社会学者が把握する秩序立てられたネットワークの外に連続的に踏み出てしまい、理論の閉じた世界をどれも自己破壊的なフィクションに変えてしまう。(Friedrichs, 1972:185)」予言のパラドックスは、社会科学の弁証法的な表現である。

我々がこの段階の検証において導きだした結論は、人間主義者か実証主義者かに関わらず、社会学的な予測には厳しい限界があることを認めねばならないということである。この限界付きの予測可能性について、いくつかの理由が引用されたが、特殊な理由は何であれ、公式的な見解では、社会学における予測の限界は、閉じたシステム・中立的・或いは人工的なシステムを提供することにこれまで失敗してきたため生じた。この閉鎖構造、或いは決定論の欠如は、社会学についてある結果をもたらす。全ての社会学は、明らかにかなりの不確実性に囲まれている。社会を対象とする技術者は、自ら提案した測定で社会状態Aが、未知の社会状態Xではなく、望ましい社会状態Bに変わるということを確実に知る立場にいない。仮に、Bが提案された測定の本当の結果であったとしても、青写真では説明されなかった他の多くの結果を

伴うことが多いに起こりうる。社会科学の文献では、この問題は社会学をも含んだ人間行動の意図せざる、及び、或いはまたは予期せざる結果として通常議論されてきた。社会学の本当の問題は予期せざる結果である。単なる意図せざる結果については、少なくとも社会的技術者によって説明されるだろう。予期せざる結果の問題は、社会学に反対する議論——全ての社会学・ユートピア的な社会学のどちらにも反対する議論——に使われたが、漸次的な社会学を進めるには都合がよかった。前者の場合、社会学の意図せず、予期もしなかった結果は、常に有害であるという暗黙の前提がある。後者では、社会学の意図せず、予期もしなかった結果は、常に有害であるという程度にまで損失が大きくなることはなく、ユートピア的な設計と比べて漸次的な設計の場合、修繕の可能性が高くなる。

結 論

社会学におけるパラダイムの危機の正味の効果は、明らかに社会学の成功を祝福し、予想できるという信仰に打撃を与えたことである。多くの社会学者は、機械技術者が橋や機械を作ったりするようなやり方で、青写真に従って社会を建築できると思いついたのをやめた。賢明な社会学者はこのことをいつまでも知っていたのだが、今日科学の信奉者の中で最も楽観的な者でも信念を揺さ振られ、それに疑いを持っている。多くの社会学者が信念を失っただけでなく、純粹さ、ないしは純粹であるという幻想を失った。社会学者の中でもまだ遮眼帯をつけるのを好み、興味深い意味で価値中立性を指向するのはもはや有力な教義ではない。危機の直接的効果は分かるが、間接的效果については何も分からない。しかし、危機の全般的な効果が長らく続くと思える理由もない。社会学者は大部分の人と同じく先見の明がないだけでなく、昔のことを忘れるのも早いのである。

既に述べたように、社会学に対する信仰の減退は、外在的な批判の効果だけによるもので

はない。科学技術の放漫さ—真実の救いを源として、全能の科学の良きおとずれを繰り返して、万能のシステム工学者の到来—が最後に破壊する前に、社会工学の後継者の間に健康な懐疑主義と、渦中の問題に対してしっかりした洞察にもとづき、課題を謙虚に受け止める態度が広まりつつある(13-14 上段)。この健康な懐疑主義は、かつて社会工学の熱烈な提唱者であったノイラートにも見られる。予測と社会工学について厳しい限界を指摘し、彼は次のように結論づける。

社会科学の難しさについて、全く異なったタイプの説明がなされなければならないだろう。一方で簡明な定式化を好む人々は失望したが、「何をやるのかを知りたい」人々も同じく失望した。両者とも明解な一つの答を望んだのである。しかしながら、社会学者はそのどちらも人類に与えなかった(Neurath 1944:43-4)。

これまで述べてきたことは、人間主義的社会学、解釈社会学の主張に完全に屈伏したと理解されるべきではない。また、実際的な目的のために、社会学理論はどのようなものであれ、その有効性を否定されたと解釈されるべきでもない。意図するものは、バランス感覚を教えこむことであって、落胆させることではない。我々は是非ともやらなければならない行為のために、常識や社会の事柄に関して全く無知なところから行為するよりも、社会学者の経験をふまえた推測によって行為したほうがきつとよいだろう。社会学者は解決を与えられないとしても、少なくとも多くの失敗を犯すことを避けるよう援助するだろう。

しかしながら、結論として社会的実践は政治的であり、社会生活の単なる管理ではない。政治的な賢明さは、ソクラテス流に論議から生まれる。

完全な洞察を加えられた行為を発見しようと望むことは、つぼみのうちに花を摘んでし

まうことである。政治は行為であり、常に不完全な観察のもとにたてられる。しかし、世界観も行為であり、多様な宇宙を包摂することは、予測できない成果を予期することである。結果的に、我々の思考は全てこのように不完全なものに依っている。我々は確実でなくとも前進せねばならない。このことに気づいているかいないかが、唯一の問題である。偽物の合理主義者は、あえてこの事実と直面しようとしな。彼らはきまって大きな課題を引き受けられない時だけ、自らの限界に気づき始める。所与の条件の性質と大きさが隠されているかぎり、知識の欠如は複数の可能性の余地を残している。しかし、それらについて完全に明らかな場合でさえ、我々の態度が決定する目標の一つを明らかにするだけである。(Neurath, 1973:158-9)。

社会学における危機の効果により、明らかに科学主義を支持しえないようになってきたが、解釈社会学の膨大な主張、つまり社会生活には、因果法則も条件依存性もないという主張を進んで受け入れようとする人は殆どいない。社会学者が一般的に受け入れている見解は、社会生活と社会学には、どちらにも必然的に解釈的な要素が入っているが、社会学には因果律と因果法則を入れる余地が残っているということである。既に見たように、ハーバースは、意味に基づく相互行為の領域と、因果の知識に基づく労働の領域を区別する。後期の著作においては、さらに間主観的な意味の生活世界と、機能的な分化と統合をなすシステムの区別を付け加えた(Habermas, 1981:171-293)。同様に、アンソニー・ギデンスは「行為の因果的な条件を犠牲にして、動機となる理念から人間行為の全てを説明しようとし」、「社会生活の統合的な特徴である制度的機構・権力・闘争を扱えない」(1976:92) 解釈社会学の深刻な欠点を見つけた(1975:155)。ギデンスによれば、社会科学における因果律と法則は、意図した行為の意図せざる結果と深い関係がある(1976:153-4;1979:242-5)。全く違うやり方で達せられたのだが、ジョ

ン・エルスターも同じ立場をとる。ギデンス同様、彼は個人の行為の意図せざる結果の中に社会生活における因果性の源、個人の意図に影響を与える「副次的意図の」因果性に対比して、彼が名付けた「超意図的」という因果律のタイプを見た(Eister, 1978:157-63; 1983:83-8)。従って、近年の社会学における一般的な傾向として、ヒンメルストランドの論議を借りれば、社会には因果的分析に耐えるような人間が作り出した機械に似た構造があるということになる(58-62 下段)。

しかし、計量可能性の問題についてはどうであろうか。社会学において計量化と測定之余地は全く残っていないのだろうか。科学主義の批判者は、多くの社会現象を計量化・測定することに関連した深刻な問題を指摘した。行き過ぎた操作主義への反動として、この批判は全く肯定される。しかし、計量化と測定が社会学から完全に除外されるという結論であれば、この批判は明らかに行き過ぎである。幸福や様々な態度といった主観的な状態を量化する意味について、また、社会学者の質問に人々が答えたものから、これらの主観的な状態の程度を測定することの妥当性について、深刻な疑問が投げ掛けられている。しかし、社会現象にも比較的確認しやすいものもある。第一に、建物・機械・道具・本や芸術作品といった物質文化の現象である。それらは人間が作った様々な構造や社会制度であり、変化していることは確かだが、計量化を批判する人が言うよりも恒常的であるように見える。人間が作った様々な構造や社会制度がある。最後に実にやっかいで金もかかるが、人が何を考え、何をやろうといったかではなく、何をやっているかという明白な行為を測る可能性がある。これらの例では、計量化と測定は適当であるばかりか、社会学を含む社会科学に欠くことができない。

近年の社会学、および社会科学の哲学における重要な傾向に、新実証主義の抬頭がある。それは、社会現象は意味を持ち、社会的事実は予め解釈されており、解釈は社会学者の仕事の一部であるという現象学や解釈学を受け入れ、そ

れにもかかわらず社会科学は自然科学と本質的には似た営みであるとする実証主義である。社会科学は自然科学と同じく因果的なメカニズムを求め、因果的法則を確立することを目指す。しかし、社会科学者は、予測し得なく、因果法則と見えるものが傾向にすぎないような、本質的には開かれたシステムを、そのシステムの中で操作していることを常に自覚しなければならない(Bhaskar, 1979; Thomas, 1979)。

この節では、様々な科学主義の限界と社会学への障害を議論してきたが、一つの重要な問題を看過してきた。人間の自由の問題である。社会学は決定論と制御を前提にするが、人間が形而上学的にも社会的にも自由であるほど、社会学は効率良く行なえない。社会学は、特定の条件 $C_1, C_2, C_3, \dots, C_n$ のもとで、 B は必ず A に伴って起こるという状況の決定論と、社会学の専門家はそれらの条件を制御するということを仮定する。人間の自由は、社会学にとって究極の障害にならないだろうか。この問題に対して答は持っていないが、そうであるかのごとく行為しなければならないという認識論的・倫理的考察がある。そうしなければ、回避できないパラドックスに陥るからである。

社会学を効果的に行うための前提から生じる二つのパラドックスがある。第一は、認識論的なもので、自由対決定論のパラドックスと呼ばれる。次のようになる。社会学を効果的に行うためには、社会学に従属する部分の決定論を最大限にすること、社会学の専門家の側の自由を最大限にすることが前提とされる。

第二のパラドックスは倫理的なもので、自由対制御のパラドックスと呼ばれる。社会学は、それに従うものを制御するために、社会設計の側に立つ者の自由、権力を最大限にする必要がある。従って、前者の自由が増えれば、後者の側の自由が減る。これら二つのパラドックスのうち、後者には既に触れられており、「自由のパラドックス」として言及された有名なものである(Popper, 1966, vol. 1:123-4; vol. 2:124-5)。そういうわけで自由対決定論のパラドックスに少しだけ触れておく。

自由対決定論のパラドックスは、社会、或いは人間工学・社会計画の文献において、不気味にその姿を表してくる。この文献の多くは、社会生活を決定論的な法則に支配されるものとして、或いは制御・再構築が可能なものとして描かれる。しかし、それは希望に従って社会を形づくるかなりの、時には限界のない自由の観念をも表す。この素描は一貫性を欠く。社会成員以上に、社会を設計するものの側に自由があると仮定する正統な理由は全くない。計画の対象になる者は、マスタープランを覆すための自分の計画を持つだろう。

自由対決定論のパラドックスは絶対的な、或いは無条件的な決定論の場合に先鋭になり、明らかに矛盾に変わる。ラプラスのデーモンは、未来の社会発展を正確に予言するだろうが、彼は社会を設計するものになれない。絶対的な決定論の仮定は、社会を意図的に作り上げる余地を残さない。

この矛盾を避けるための試みで、自由は必然性についての知識であるというヘーゲルの定式化に頼ることがある。しかし、それはできない。ヘーゲルの定式化は、人と自然との関係に適用されたときに通用する。人が自分の利益のために自然法則の利用の仕方を知れば知るほど自由になるということは、当然仮定できる。この場合パラドックスはない。なぜなら、自然の決定論は人間の自由と完全に併存できる。社会工学の場合にのみ、つまり、人間が設計の主体であり、客体でもある場合に、自由対決定論のパラドックスが起こる。従って、ヘーゲルの定式化を社会生活に当てはめるのは意味がない。社会生活において必然性は自由を破壊する。社会生活において、自由は社会工学の（そして行動主義の）前提であり、その効果的な遂行の障害でもあるというパラドックスを我々は抱えている。

註

1 社会科学にパラダイムがあるかどうかは、議論が分かれるところである。トマス・S・クーンによれば (1970:20-1, 160-1, 178-9)、経済学を唯

一可能な例外として、社会科学はパラダイムを形成する前の段階にある。この章では、フリードリックスに従い (1972:Chs. 1-2)、社会学にも「パラダイム」という言葉が同じようにあてはまるとする彼の考え方をとる。

2 社会科学における科学主義の分析のために、フリードリヒ・フォン・ハイエクの「科学主義と社会の研究」と「科学による反革命」という二つの論文 (1955) を見よ。ハイエクによれば、科学主義という言葉は、「科学の方法と言語を奴隷のように模倣すること」を意味する (1955:15)。

3 「社会工学」という言葉は、カール・ポPPERにより広まったが (1966, 巻1:22-4, 1961:42-5)、彼以前にも何人かに用いられていた。この言葉を初めて使ったのは、おそらくオットー・ノイラートに違いないと思われるが、彼は、1919年に「このようにユートピアは、技術者の設計図にそって作られる。そして、人々は正当にもそれらを社会工学の建造物と呼ぶのである。」と書いている (ノイラート, 1973:151)。しかし、ポPPERも参照されたい (1966 巻 1:210 註9.)。

4 初期社会学 (それ以降の社会学にとっても) に典型的であったのは、道徳的、或いは「イデオロギー的な」共同体の存在をもって、社会の本質とみなしたことである。したがって、道徳教育は社会状況の改善を進める当然の手段と考えられた。エミール・デュルケムの著作『道徳教育論』はその典型である (1973)。サン・シモンが新キリスト教を要請し、コントが人類教を要請したところに (下記参照)、デュルケムは社会集団への愛着に基礎を置く世俗道徳を求めたのであった (1973:1-14, 54以下)。『社会分業論』の第二版の序論で、デュルケムが提案したより明確な解決方法は (1964)、職業集団を確立してアノミーを作り出す労働の傾向をくい止めることであった。

5 ウェーバーの著名な講演「職業としての学問」を参照のこと (1970:129-56)。事実と価値との関係を分析するために、「社会科学および社会政策における認識の客観性」(初版1904年)と「社会学と経済学における価値自由の意味」(1949)も参照されたい。

6 第一次世界大戦の間、オットー・ノイラートはウイーンの War ministry 戦時経済のための特別な部局で直接業務に携わっていた。戦争直後 (1919) ミュンヘンのババリア州中央計画局の総裁になった。

- 7 ミードはデューイと違い、社会学の可能性については懐疑的であった。「我々の行為を予測によって制御するために、社会の発展に左右される未来の状態を予測することは不可能である。何が起こるかは常に予測できない。なぜなら、発生すると考えられる事態の直後の変化だけでなく、全体世界の中での変動とそれに対する全体の反応をも認識しなければならない。どんな人間もこのようなことは予測できない (Mead, 1964:3)。」
- 8 物理学者の P. W. ブリッジマンは、通例操作主義の創始者と言われている。彼は「一主義」の創始者とされた多くの人々同様、後継者を認めなかったし、操作主義が彼の嫡子であることも否定した。「操作的分析」(1938)の方法を明らかにしようとした論文で、ブリッジマンは、操作が必然的に測定であり、操作は全て意味を持っているということを否定している。操作的な分析は、科学の概念の意味において必要な要素ではあるが、十分な要素ではない。
- 9 「漸次的」社会学の言葉はポッパーに遡り、「ユートピア的」社会学に対置させられた(1966, 巻1, 157-68, 巻2:125 以下;1961:64-70)。「漸進主義」或いは社会政策に対する「漸進的なアプローチ」という言葉と、それに対立する「合理的-包括的なアプローチ」については、リンドブルーム (1973:161ff) とファルディ (1973:150-70) を参照せよ。
- 10 ファルディ (1973)。社会学のシステムアプローチに関しては、ボクスロー (1965) とチャーチマン (1968) を参照せよ。社会学、或いは社会計画に対する第三のアプローチは、アマタ・エツィオーニによって提案された。それは「混合スキニング」と呼ばれ、漸進的アプローチと合理的-包括的なアプローチとを、新しい、より合理的であると期待される総合化の要素として結合しようと試みた。「意志決定が混合スキニングの戦略に基づいてなされる行為者は、部分的な、或いは項目ごとの決定から、状況に応じた、または根本的な決定を弁別する。状況に応じた決定は、行為者によって彼の目的に見られる主要な選択肢を探ることからなされるが、包括的な合理性が教えるものとは異なり、外観をもっともらしくするために細部や特殊なものが削除される。部分的な決定は「漸進的」になされるが、根本的な決定そして評価により設定されたコンテキスト内でのことである。このように、混合スキニングの戦略における二つの要素のいずれも、他方の特殊な弱点を宥和することに役立つ。
- 11 その例として、ハーマン・カーンと J. ウイナーの『西暦二千年、未来予測の構図』(1967)とローマクラブの二つのレポート、デニス・ミードス他編『成長の限界』(1972)とミジェロ・メサロビックとエドワード・ベステルの『転機に立つ人類』(1975)がある。
- 12 これは、危機の政治的・イデオロギー的側面が、理論的・方法論的側面から切り離せると指摘しているのではない。事実と価値の問題を切り離し、社会学のどこの部分が危機に陥っているかという問題を仮定しているはずである。
- 13 ここでは「ラディカル」社会学は、ニューレフトの社会学のみならず、社会学思想の象徴的相互作用論者・現象学派・エスノメソドロジー派の多くの学者によって追求されるリベラルな社会学をも意味している。
- 14 グールドナーによれば (1975:40以下)、シカゴ学派の流れに属するベッカーやその他の社会学者に代表されるこの種の負け犬の社会学は、福祉国家の到来とともにラディカルでなくなり、そのかわり新しいリベラルの既成集団になった。グールドナーは、新興ブルジョアジーに典型的で、体験を求めるゴッフマンやエスノメソドロジストの新しい社会学についての分析をも提供する (Gouldner, 1971:342以下。エスノメソドロジーについての同様の分析が、Gellner 1975:431-50にも見られる。) ゲルナーによれば、エスノメソドロジーは本質的に一つの政治運動であり、主として若者に、父性的権威に反抗することの必要性を説くが、当該の社会秩序に疑問を投げ掛けることはしない。
- 15 しかしながら、パーソンズは、1950年代以降応用社会学の要求に対して幾分神経質になっていたことは認めなければならない (Parsons, 1954:368-9;1959:555-7, Friedrics, 1972:118-21も見よ。;Gouldner, 1971:342以下)。また、機能主義が最終的にはシステム理論におおいかくされていくにつれて、現代社会科学の技術的なエートスの最も重要な表現を帯びてくるようになったことも指摘しておくべきである。
- 16 「参加者」と「傍観者」という言葉は、ノルウェーの哲学者ハンス・スキエルブハイムの *Deltagare och Askadare* (1971) という著作の表題から翻訳したものである。この本は、社会学におけるパラダイム危機の高まりの中で、スカンジナビア地域の社会学者にかなりの影響を与えた。
- 17 「アクション・リサーチ」という言葉は、もと

- もと心理学者のクルト・レヴィンに用いられたが、この論文で用いられたのとは全く異なる意味、むしろ対立する意味であった (Himmelstrand, 1982:43-4)。ラザースフェルドとライツによれば (1975:8)、「レヴィンは、『アクション・リサーチ』という言葉に、かなり特殊な意味を与えた。個人の行動と決定の研究は小集団の影響の下に行われ、その代わり操作的に扱われる。その後で誤解が生じ、実際的な目的の追求を目指す社会調査のやり方という広い意味で、ある人々に用いられた。」この広い意味で「アクション・リサーチ」という言葉を用いた一人が、タルコット・パーソンズである。彼は、それを「直接実践的な結果を生み出す」ことを目指す社会調査と意味付けた (1959:557)。この章では、アクション・リサーチという言葉で第三の意味で用い、政治的にラディカルな実践の結果を目標とする社会調査を示すことにする。
- 18 A. R. ルーチ (1966) が代表の第三版もその中にあり、それによれば人間の行為の記述や説明は、評価の要素を必然的に含む。この版では社会科学は道徳科学となる。
- 19 法的規範に基礎を置く社会の再構成と「自然法」に基礎を置くそれとの違いは、サン・シモンとコントが述べた、人による人の支配と諸物の管理 (アドミニストレーション) の区別に基づく。「人類が自発的な運動の原理を持たず、また、最も雄弁な言い回しにもかかわらず、立法者に動機づけられるものと考えられる限り、かなりの恣意性が、生活の重要な側面に影響するに違いない。——それとは逆に、科学的な政治形態は恣意性を一切排する。なぜなら、そのような恣意性を生み、且つ維持する抽象的で曖昧な概念は、科学的な政治形態に消されるからである。このような体制の下で、人類は発展の自然法則の客体とみなされる。そのような法則は、観察によってつきとめられ、最も明確なやり方、追求可能な政治的筋道でそれぞれの段階ごとに描かれる。つまり、恣意性は必然的になくなり、人による政治は法則による政治に置き換えられる (Comte, 1975:49)。」
- 20 行為が通常意図せざる結果を伴うという事実は、社会思想史において重要な役割を果たす。それは、社会或いは市民社会が、自然に作られた秩序または「有機体」として存在し、さらに社会学的分析 (そして経済学) の対象になっている事実による。少なくとも社会科学の先駆者のうちには、そういう議論を行なったものがある。これは、マンデビルやファーガソン、スミスに
- 21 これは、ルードヴィヒ・フォン・ミゼスやフリードリヒ・フォン・ハイエク、ミルトン・フリードマンのような自由放任主義の政策であり、彼らは自己制御的で申し分なく機能している市場メカニズムに対するいかなる介入も、破滅的な結果をもたらすと考える。どのような介入もシステム内の別の部分に意図せざる結果をもたらす。それは元に回復されなければならないが、それもまた新しい意図せざる結果を生み出し、初めから繰り返される (Hayek, 1955:94-102を参照)。
- 22 これは、カール・ポPPERやチャールズ・リンダブルームのそれほどラディカルでもない自由主義の見解である。彼等は社会改革を必要と考えたが、修正、改善のレベルを越えた徹底的な方針には警告を発した (Popper, 1961:66-70; 1966, 巻1:157-68; Lindblom, 1973:151-69)。
- 23 社会学に対する信念が薄らいだだけでなく、社会学それ自体広まっていなかったように思える。少なくとも、社会学の拡大は一時的留まった。そして、社会学に対する社会学者の信念が揺らいだだけでなく、彼等の顧客の信念も揺らいだのである。社会学は、この十年の間に政治家や実業界で人気が無くなってきた。たぶん革命の道具としての社会学理論の有効性における信仰も薄れている。これは驚くほどのことではない。実践的な問題の解決に役立つ社会的知識の有効性に関して、多くの社会学者によってなされた予測は、そのような知識を求める者を失望させずにはいないだろうというものであった。社会学の人气が衰えてきた傾向は、変動してやまないイデオロギー状況に強められた。1960年代と1970年代初期の政治的ラディカリズムは、新自由主義の反動を伴った。また、周知のように、自由主義は社会学に敵意を持っており、特に国家の側からのそれや神聖な市場の自由に対する介入には格別である。
- 24 これは、シクレルやその他のエスノメソドロジストらによって指摘された。社会的概念の蓋然的な特徴を否定するものではない。それらはかなりの程度伝統的な特徴から導かれたものである。
- 25 自由対決定論のパラドックスは、すでにG. H. Mead によって知られている。「しかしながら、ここにはかなり重要な相違がある。物理的な世

界において我々は、自分たちがある程度そこで働く諸力の影響外にあると考えているが、そのため必然性についての認識と人間主体の感情を調和させる困難さを避けるのである。社会において我々こそが探求される諸力であり、仮に社会的世界を変革するために、その現象をただ記述するだけのレベルを越えれば、我々自身が必然的に拘束されていると仮定されるものを動かす可能性を同時に持っているのである。さらに、未来世界についての固定した捉え方によって直接なされた全ての試みは、失敗であるだけでなく、有害でさえある (Mead, 1964:4-5)。」

- 26 行動主義心理学者 J. B. ワトソン (1970:104) による次の例は示唆的である。「私にダースの健康な子供達と整式、彼等を育てる特別な環境を与えよ。そうすれば、どのような子をとっても、私が選ぶ特定のタイプに育てあげてみせることを保証する。子供達の才能や嗜好、性癖、能力、祖先の職業や血統にかかわらず、医者、弁護士、芸術家、商人、お望みなら強盗や泥棒にさえ育てることができる。」この言明は、子供達は完全に外的諸力によって規定されていること、同時にワトソン博士は、彼らの将来の選択を全く自由に行い得ることを示す。
- 27 例えば、フリードリヒ・エンゲルスを見よ。「ヘーゲルは自由と必然の関係について正確に語った最初の者である。自由は自然法則から離れた夢には存在しない。自由はこれらの法則の知識に、また特定の目的に向けて諸法則を体系的に作用させる可能性のなかにある (1969:139)。」さらに驚くべきことに、全く同じ考えがコントが述べた次の文章にも表れている。「革命的な哲学にふさわしい進歩という観念こそ、自由の表現の延長にある。すなわち、実証的な言葉を用いれば、真の自由に向けて人類の力が次第に増加していくことは、あらゆる恣意的・個人的な命令を離れて、自然法則の優越感を合理的に認めていくこと以外のなにものでもない。」(1975:214) しかしながら、自由と必然の関係に関するこの考えは、ヘーゲルにもコントにもなく、スピノザにその起源があったのである(例えば、Stuart Hampshire, 1968 を参照せよ)。

参考文献

- Althusser, L. (1971) *Lenin and Philosophy*. New York: Monthly Review Press.
- Anscombe, G. E. M. (1963) *Intention*, 2nd. ed. Oxford: Basil Blackwell.
- Anscombe, G. E. M. (1968), 'Intention', pp. 144-52 in A. R. White (ed.), *The Philosophy of Action*. Oxford: Oxford University Press.
- Becker, H. S. (1970) 'Whose Side are We On?', pp. 15-26 in W. J. Filstead (ed.), *Qualitative Methodology*. Chicago: Rand McNally.
- Berger, P. L. (1963) *Invitation to Sociology: A Humanistic Perspective*. New York: Doubleday.
- Bhaskar, R. (1979) *The Possibility of Naturalism*. Brighton: Harvester Press.
- Blalock, H. M. (1968) 'The Measurement Problem: A Gap Between the Languages of Theory and Research', pp. 5-27 in H. M. Blalock and A. B. Blalock (eds), *Methodology in Social Research*. New York: McGraw-Hill.
- Blalock, H. M. (1969) 'Comment on Coleman's Paper', pp. 115-21 in R. Bierstedt (ed.), *A Design for Sociology*. Philadelphia: American Academy of Political and Social Science.
- Blalock, H. M. (1970) *An Introduction to Social Research*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Blumer, H. (1969) *Symbolic Interactionism*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Boguslaw, R. (1965) *The New Utopians*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Bridgman, P. W. (1938) 'Operational Analysis', *Philosophy of Science*, 5: 114-31.
- Brodbeck, M. (1968) 'Explanation, Prediction and "Imperfect" Knowledge', pp. 363-98 in M. Brodbeck (ed.), *Readings in the Philosophy of the Social Sciences*. New York: Macmillan.
- Churchman, C. W. (1968) *The Systems Approach*. New York: Dell.
- Cicourel, A. V. (1964) *Method and Measurement in Sociology*. New York: Free Press.
- Cohen, M. R. (1978) *Person and Nature. An Essay on the Meaning of Scientific*

- Method. New York: Dover.
- Coleman, J. (1979) 'Sociological Analysis and Social Policy', pp. 677-703 in T. Bottomore and R. Nisbet (eds), *A History of Sociological Analysis*. London: Heinemann.
- Comte, A. (1975) *August Comte and Positivism. The Essential Writings*, ed. G. Lenzer. New York: Harper & Row.
- Deutscher, I. (1970) 'Words and Deeds: Social Science and Social Policy', pp. 27-51 in W. J. Filstead (ed.), *Qualitative Methodology*. Chicago: Rand McNally.
- Dewey, J. (1962) *Individualism—Old and New*. New York: G. P. Putnam's Sons.
- Dewey, J. (1963) *Liberalism and Social Action*. New York: Capricorn Books.
- Dewey, J. (1970), 'The Development of American Pragmatism', pp. 23-40 in H. S. Thayer (ed.), *Pragmatism: The Classic Writings*. New York: New American Library.
- Durkheim, E. (1964) *The Division of Labour in Society*. New York: Free Press (first published 1902).
- Durkheim, E. (1973) *Moral Education*. New York: Free Press.
- Elster, J. (1978) *Logic and Society*. New York: John Wiley.
- Elster, J. (1983) *Explaining Technical Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Engels, F. (1969) *Anti-Duhring*. Moscow: Progress Publishers.
- Etzioni, A. (1971) *The Active Society*. New York: Free Press.
- Faludi, A. (1973) *Planning Theory*. Oxford: Pergamon Press.
- Filstead, W. J. (1970). 'Introduction', pp. 1-11 in W. J. Filstead (ed.), *Qualitative Methodology*. Chicago: Rand McNally.
- Fischer, B. M. and A. L. Strauss (1979) 'Interactionism', pp. 457-98 in T. Bottomore and R. Nisbet (eds), *A History of Sociological Analysis*. London: Heinemann.
- Friedrichs, R. W. (1972) *A Sociology of Sociology*. New York: Free Press (first published 1970).
- Fromm, E. (1966) *Marx's Concept of Man*. New York: Frederick Ungar (first published 1961).
- Garfinkel, H. (1967) *Studies in Ethnomethodology*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall.
- Garfinkel, H. (1974) 'The Origin of the Term "Ethnomethodology"', pp. 15-18 in R. Turner (ed.), *Ethnomethodology*. Harmondsworth: Penguin.
- Garfinkel, H. and H. Sacks (1970) 'On Formal Structures of Practical Actions', pp. 337-66 in J. C. McKinney and E. A. Tiryakian (eds), *Theoretical Sociology. Perspectives and Developments*. New York: Appleton-Century-Crofts.
- Gellner, E. (1975) 'Ethnomethodology: The Re-enchantment Industry or the Californian Way of Subjectivity', *Philosophy of the Social Sciences*, 5: 431-50.
- Giddens, A. (1976) *New Rules of Sociological Method*. London: Hutchinson.
- Giddens, A. (1979) *Central Problems in Social Theory*. London: Macmillan.
- Glaser, B. G. and A. L. Strauss (1967) *The Discovery of Grounded Theory*. New York: Aldine.
- Glaser, B. G. and A. L. Strauss (1970) 'Discovery of Grounded Theory: A Basic Strategy Underlying Qualitative Research', pp. 288-304 in W. J. Filstead (ed.), *Qualitative Methodology*. Chicago: Rand McNally.
- Glaser, N. (1967) 'The Ideological Uses of Sociology', pp. 63-77 in P. F. Lazarsfeld, W. H. Sewell and H. L. Wilensky (eds), *Uses of Sociology*. New York: Basic Books.
- Gouldner, A. W. (1965) 'Explorations in Applied Social Science', pp. 5-22 in A. W. Gouldner and S. M. Miller (eds), *Applied Sociology. Opportunities and Problems*. New York: Free Press.
- Gouldner, A. W. (1971) *The Coming Crisis of Western Sociology*. London: Heinemann (first published 1970).
- Gouldner, A. W. (1975) *For Sociology. Renewal and Critique in Sociology Today*. Harmondsworth: Penguin (first published 1968).

- Habermas, J. (1971a) *Knowledge and Human Interests*. Boston: Beacon Press.
- Habermas, J. (1971b) 'Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie?', pp. 142-290 in J. Habermas and N. Luhmann, *Theorie der Gesellschaft oder Sozialtechnologie*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Habermas, J. (1971c) *Toward a Rational Society*. London: Heinemann.
- Habermas, J. (1981) *Theorie des Kommunikativen Handelns*. Frankfurt am Main: Suhrkamp.
- Hampshire, S. (1968) 'Spinoza and the Idea of Freedom', pp. 48-70 in P. F. Strawson (ed.), *Studies in the Philosophy of Thought and Action*. Oxford: Oxford University Press.
- Hauser, P. (1969) 'Comment on Coleman's Paper', pp. 122-8 in R. Bierstebt (ed.), *A Design for Sociology*. Philadelphia: American Academy of Political and Social Science.
- Hayek, F. A. von (1955) *The Counter-Revolution of Science*. New York: Free Press.
- Hayek, F. A. von (1967) *Studies in Philosophy, Politics and Economics*. New York: Simon & Schuster.
- Hempel, C. G. (1965) *Aspects of Scientific Explanation*. New York: Free Press.
- Himmelstrand, U. (1982) 'Innovative Processes in Social Change: Theory, Method and Social Practice', pp. 37-66 in T. Bottomore, S. Nowak and M. Sokolowska (eds), *Sociology. The State of the Art*. London: Sage.
- Hamans, G. C. (1964) 'Contemporary Theory in Sociology', pp. 951-77 in R. E. L. Faris (ed.), *Handbook of Modern Sociology*. Chicago: Rand McNally.
- James, W. (1963) *Pragmatism and Other Essays*. New York: Washington Square Press.
- Kuhu, T. S. (1970) *The Structure of Scientific Revolutions*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lazarsfeld, P. F. (1962) 'Philosophy of Science and Empirical Research', pp. 463-73 in E. Nagel, P. Suppes and A. Tarski (eds), *Logic, Methodology and Philosophy of Science*. Stanford: Stanford University Press.
- Lazarsfeld, P. F. and J. G. Reitz (1975) *An Introduction to Applied Sociology*. New York: Elsevier.
- Lazarsfeld, P. F., W. H. Sewell and H. L. Wilensky (1967) 'Introduction', pp. ix-xxiii in P. F. Lazarsfeld, W. H. Sewell and H. L. Wilensky (eds), *The Uses of Sociology*. New York: Basic Books.
- Lindblom, C. E. (1973) 'The Science of "Muddling Through"', pp. 151-69 in A. Faludi (ed.), *A Reader in Planning Theory*. Oxford: Pergamon Press (first published 1959).
- Louch, A. R. (1966) *Explanation and Human Action*. Berkeley: University of California Press.
- Luckmann, T. (1973) 'Philosophy, Science and Everyday Life', pp. 143-85 in M. Natanson (ed.), *Phenomenology and the Social Sciences*, Vol. 1. Evanston, Ill.: Northwestern University Press.
- Lundberg, G. A. (1947) *Can Science Save Us?* New York: Longmans, Green.
- Macdonald, G. and P. Pettit (1981) *Semantics and Social Science*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Macintyre, A. (1962) 'A Mistake about Causality in Social Science', pp. 48-70 in P. Laslett and W. G. Runciman (eds), *Philosophy, Politics and Society*, 2nd series. Oxford: Basil Blackwell.
- Macintyre, A. (1973) 'The Essential Contestability of Some Social Concepts', *Ethics*, 84:1-9.
- Marcuse, H. (1966) *One-Dimensional Man*. Boston: Beacon Press (first published 1964).
- Marcuse, H. (1969) *Negations. Essays in Critical Theory*. Boston: Beacon Press.
- Marx, K. (1954) *Capital*, Vol. 1. Moscow: Progress Publishers.
- Mead, G. H. (1964) *Selected Writings*. Chicago: University of Chicago Press (first published 1899).
- Merton, R. K. (1957) *Social Theory and Social Structure*, 2nd ed. New York: Free Press.

- Mill J. S. (1950) *Philosophy of Scientific Method*. New York: Hafner. Mills, C. W. (1970) *The Sociological Imagination*. Harmondsworth: Penguin (first published 1959).
- Morris, C. (1970) *The Pragmatic Movement in American Philosophy*. New York: George Braziller.
- Nagel, E. (1961) *The Structure of Science*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Neurath, O. (1944) *Foundations of the Social Sciences*. Chicago: University of Chicago Press.
- Neurath, O. (1959) 'Sociology and Physicalism', pp. 287-317 in A. J. Ayer (ed.), *Logical Positivism*. New York: Free Press.
- Neurath, O. (1973) *Empiricism and Sociology*, ed. M. Neurath and R. S. Cohen. Dordrecht: D. Reidel (first published 1931).
- Nicolaus, M. (1972) 'The Professional Organization of Sociology: A View from Below', pp. 45-60 in R. Blackburn (ed.), *Ideology in Social Science*. London: Fontana/Collins.
- Parsons, T. (1954) *Essays in Sociological Theory*, rev. ed. New York: Free Press.
- Parsons, T. (1959) 'Some Problems Confronting Sociology as a Profession', *American Sociological Review*, 24: 547-59.
- Peirce, C. S. (1957) *Essays in the Philosophy of Science*. Indianapolis: Bobbs-Merrill.
- Popper, K. R. (1961) *The Poverty of Historicism*. London: Routledge & Kegan Paul (first published 1957).
- Popper, K. R. (1966) *The Open Society and Its Enemies*. London: Routledge & Kegan Paul (first published 1945).
- Saint-Simon, C. H. de (1964) *Social Organization, The Sciences of Man and Other Writings*, ed. F. Markham. New York: Harper & Row.
- Schutz, A. (1954) *The Phenomenology of the Social World*. London: Heinemann.
- Searle, J. R. (1969) *Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Skjervheim, H. (1971) *Deltagare och Askadare*. Stockholm: Prisma.
- Spencer, H. (1969) *The Study of Sociology*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Spencer, H. (1969) *The Man versus the State*, ed. D. Macrae. Harmondsworth: Penguin.
- Thayer, H. S. (1970) 'Introduction', pp. 11-22 in H. S. Thayer (ed.), *Pragmatism. The Classical Writings*. New York: New American Library.
- Therborn, G. (1980) *Science, Class and Society*. London: New Left Books.
- Thomas, D. (1979) *Naturalism and Social Science. A Post-Empiricist Philosophy of Social Science*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Thomas, W. I. (1966) *On Social Organization and Social Personality*. Chicago: University of Chicago Press.
- Udehn, L. (1981) 'Central Planning: Postscript to a Debate', pp. 29-60 in U. Himmelstrand (ed.), *Spontaneity and Planning in Social Development*. London: Sage.
- Udehn, L. (1982) 'The Conflict between Methodology and Rationalization Thesis in the Work of Max Weber', *Acta Sociological*, 24.
- Waismann, F. (1968) 'Verifiability', pp. 35-60 in G. H. R. Parkinson (ed.), *The Theory of Meaning*. Oxford: Oxford University Press.
- Watson, J. B. (1970) *Behaviorism*. New York: W. W. Norton.
- Weber, M. (1949) *The Methodology of the Social Sciences*, ed. E. A. Shils and H. A. Finch. New York: Free Press.
- Weber, M. (1970) *From Max Weber. Essays in Sociology*, ed. H. H. Gerth and C. W. Mills. London: Routledge & Kegan Paul.
- Weber, M. (1975) *Roscher and Knies. The Logical Problems of Historical Knowledge*. New York: Free Press.
- Weber, M. (1978) *Economy and Society*, ed. G. Roth and C. Wittich. Berkeley: University of California Press.
- Winch, P. (1958) *The Idea of a Social Science*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Wright, G. H. von (1971) *Explanation and Understanding*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Zetterberg, H. (1962) *Social Theory and Social Practice*. New York: Bedminster

Press.

Zimmerman, D. H. and M. Pollner (1974)
'The Everyday World as a Phenomenon',
pp. 80-103 in J. D. Douglas (ed.), *Under-
standing Everyday Life*. London: Rou-
tledge & Kegan Paul.

付記

拙訳は1988年5月と6月のパラダイム研究会
で紹介したものをまとめたものである。論旨の
検討、訳語の吟味など会員の方々に多くを負っ
ている。とりわけ、北海学園大学の村井忠政教
授には、訳稿に何度も目を通して頂いた。また、
人名の表記に関しては、北星短期大学のトーキ
ル・クリステンセン助教授に御教示願った。記
して感謝します。